

こてやりたい位のものだ。思想のアソシエーションといふものは危険だからね。

主人。それはさうかも知れない。併しね僕のこの跛になつた歩き付きを見せずに置くわけには行かないのだ。僕は實はサビイネの爲に心配するよりは寧ろミルラやエンミイやエヂトの爲に心配するのだ。向上機が今日飛ぶと飛ばないとは一家のものの死活問題だ。言つて見れば僕は一枚の骨牌に一家の運命を賭してゐるのだ。名譽も位置も賭してゐるのだ。僕の一家ばかりではない僕が破産してしまへば、今度の事業に金を出してくれた何軒かの株主も痛い目に逢ふわけだ。どうぞ察してくれ給へ。詰まり僕は喉を扼して白刃を押つけられてゐるのだからね。

醫學士。そんなら少なくともなんとか理屈を付けて、エンミイとエヂトを外へやつてしまひ給へ。

主人。さう出し抜けに、なんと理屈が付けられるものか。それに遣るといつても遣り場もない。

醫學士。併しね、神經過敏な人は、物を見抜く事は非常に鋭いものだ。あのエヂトが亡くなつたオホエルベックのわすれがたみだなんぞといふ事を、外の人には言つても好からうが、サビイネさんはその手は食はないよ。それは僕が豫言して置く。

主人。誰が本當の事をすつば抜くといふのだい。エンミイと君と二人と、きやあの一件を知つてゐるものはないぢやないか。

醫學士。所があるのだ。ミルラが知つてゐる。

主人。それは君がさう思ふばかりさ。それに爲合せと、エヂトは顔がちつとも僕に似てゐないからね。

醫學士。併しエンミイに似てゐるよ。僕が頼むからエンミイとエヂトとをどこかへ遣つて置き給へ。最初二三日の間でも好いから。

主人。いや、そんな事は僕はしない。斷じてしない。なせといつて見給へ。今の所ではエンミイの方が、サビイネより、どれだけ僕に身近くなつてゐるか知れない。そこで若しごつちかど立ち退かねばならぬとなれば、(時計を見

る。待つてくれ給へ。エンミイに話さなくては。

醫學士。僕もまだ二三軒廻る所があるのだ。何か相應の用事があるかも知れないから、僕も午には来るよ。左様なら。

主人。左様なら。

(醫學士左前の入口の戸より退場。主人左手廊下の扉を開く。)

主人。(呼ぶ)エンミイ。ちよいとお出。

世話娘。(呼ぶ)只今。直ぐ参ります。

(短き間。世話娘左手廊下の戸口より登場。)

世話娘。(部屋に入り来る。)なに御用。(進み近付く。)どうなすつたの。大層改まつて。

主人。まあ、そこへ掛けてくれ。少し話したい事があるから。

世話娘。まあ、何事なの。(心配らしく)郵便のこと。

主人。まあ、聞いてくれ。縦へどんな事があつても、お前と己とは別れようのなんのと、氣まつい事を言ひつこなしたよ。それに不同意はあるまいね。

世話娘。まあ、わたし心配だわ。何事なの。早く言つてお聞せなさいよ。そんな前置きなんぞをして。

主人。(吃りつゝ)まあ、聞いてくれ。お前は普通の女ではない。(間)己の一家の幸福はお前が一しよになつて奮闘して基礎を造つてくれたのだ。(間)世のあらゆる敵に反抗して奮闘してくれたのだ。(間)その戦を半途で止めるやうな事は出来ないわけだ。(間)縦へどんな事が出来ようとも、二人離れ離れになるやうな事はないのだよ。

世話娘。(甚しく激したる様子)まあ、なんといふ長い前置なの。本當の事を仰やいよ。サビイネさんが歸つて来るのですか。

主人。やうだ。歸つて来るのだ。

世話娘。(愈々激したる様子)まあ、大變な事になりましたのね。

(世話娘よろけて倒れんとするを主人支ふ。世話娘椅子に倒るゝやうに腰掛け、兩手にて顔を押さふ。)

主人。どうも今更爲據がないのだよ。もう今日歸るのだから。

世話娘。どうしてそんな事になつたのでせう。  
主人。跡でゆつくり話して聞かせるがね今そんな事を言つてはゐられない。さういふ中にもこゝへ歸つて来るかも知れないから。

世話娘。(兩手を握り、それにて腮を支ふ。)大變な事になつたのね。大變な事に。

主人。まあ、じつかりしてくれないぢや困るぢやないか。そんな様子をしてゐては、歸つて来たのに逢ふ事は出来やしない。それでは一目見てどうかしてゐるのが分かるぢやないか。

世話娘。ねえ、あなた、電報を打つて下さいよ。歸らないやうに電報を打つて。

主人。そんな隙はないのだ。乗つて来る筈の汽車はもうどつくに着いてゐる。

世話娘。(愈々激したる様子。)そんなら内へ入れないやうにして下さい。

わたしはあの人が憎いのだから。わたしはあの人に逢ふのは厭です。何年

も何年も立つてから、あの人が突然この中へ這入つて来るわけはないのです。さつきもホルストさんがなんと云ひましたつけ。さうさう。巢といふものは神聖なものだ。誰も巢を破るといふ事は出来ないと云つたでせう。サビネさんはあの頃あなたの生活を破壊した人です。わたしだつて知つてゐます。あなたがあの人もう愛してゐないといふ事は知つてゐます。その女がこゝへ来て、また昔のやうにあなたを困らせるのを、わたしは黙つて見てゐる事は出来ません。わたしにだつてそんな事をさせないやうに禦ぐだけの権利はあります。どうぞこの内の鬨をまたがせないやうにして下さい。

主人。そんな事をいふものぢやあない。そんな事が出来ないとはいふ事はお前にだつて分からうぢやないか。こゝはフィデイ群島ぢやあない。世間體といふものもあるからな。

世話娘。(涙に聲を曇らせて。)そんならわたしはお暇をするだけです。

主人。そんな事を。お前が行つてなるものか。知れ切つた事ぢやあないか。

世話娘。あの方が這入つて來れば、わたしが出て行かなくてはならないのです。それが知れ切つた事なのです。

主人。馬鹿な事を云へ。己はお前の出て行く事なんぞは承諾しない。縦へサビイネは己の正妻であるにしても、己とサビイネとが本當の夫婦としてこれから暮すといふ事は不可能だ。己の本當の妻はお前の外には無い。お前無しに己が生活して行かれないといふ事は、お前にだつて分かつてゐようぢやないか。

世話娘。そんな事をあの人が黙つて見てゐるものですか。

主人。何もあれに直ぐそんな素振を見せなくても、好いちやないか。もうそんな事を云はないで、じつかりと腹を極めて、今後の成行を己とせしよに見てくれい。どうだ。分かつたらう。

世話娘。あなたがさう仰やるなら、わたしもその氣になりませう。どうも外に爲様はないのですから。(突然ためらひつゝ)でも向上機はどうなさるの。

主人。今日飛ばすのだ。

世話娘。この最ちゆうに。

主人。何事があつても飛ばすのだ。

世話娘。おや。今ベルが鳴つたぢやございせんか。

(女ちゆうエロニカ左手廊下の戸口より登場。)

主人。(女中に)門口だよ。

(女中左前の入口の戸より退場。)

世話娘。サビイネさんでせう。

主人。己も動悸がする。

(女ちゆう手に荷物を持ち、再び左前の入口の戸より登場。)

女中。(さも事ありげなる様子)奥さんでございます。

世話娘。(主人に)荷物はどこへお置かせなさるの。

主人。無論あの客間に置かせるさ。

世話娘。(嬉しさうに主人の顔を見る)そんならわたし客間を片付けて参

りませう。

(世話娘と女中と左奥の間へ退場。主人入口の戸に歩み寄る。入口の戸を外より開けて、主人の妻サビイネ登場。主人とサビイネとはちつと顔を見合す。)

妻。あなたもうわたしをお見忘れなさつたの。

主人。途方もない事を。(間) まあ、好く直つて歸つて来たなあ。

妻。(叫ぶ如く) アンセルムさん。

(妻夫の胸に劇しく抱き付き、嬉し涙を灑しつつ。)

もうどんな事があつたつてわたしはあなたとは分かれませんよ。わたしはいつまでもこの内にゐます。いつまでも、いつまでも。わたしはもうすつかり直つて、不漸の通りになりましたの。これからは御一しよに楽しく暮らせうね。毎日、毎日一時間も離れずに。何年も何年も逢はないで堪へてゐたのを、これから取り返さなくてはならないのですから。わたし共夫婦だつて、幸福を求める権利はある筈です。あなただつてさう思つて入らつじやるで

せう。(間) まあ、顔を見せて下さいよ。大變お變りなさいましたのね。あの顛願の所が白くなりましたのね。それに目尻に皺が出来ましたわ。御覽なさい。わたしもこんなに白髪になつてしまひましたわ。あの、ミルラはごこにゐますの。

主人。今庭に遊んでゐたつて。己が直ぐに呼んで来よう。(間) さういふけれど、お前はあんまり變つてはゐないよ。

妻。なんの變らないものですか。もうすつかりお婆あさんになりましたの。それは自分でも好く知つてゐます。第一心からしてお婆あさん染みて来たのですから。(間) おや、誰でせう。

(世話娘左手廊下の戸口より登場。サビイネの側に歩み寄る。)

主人。(妻に) これがエンミイだ。お前も知つてゐるだらう。己の姪のエンミイ、フォンゲルスドルフだ。顔は知つてゐた筈だが。

妻。(微笑む) まあ、知らないでどうじませう。エンミイさん久し振りなのね。

世話娘。(少し冷淡に。)サビイネさん、御機嫌よう。どんなお工合なの。

(二人の女接吻す。)

妻。お前さんには澤山澤山お禮を言はなくてはならないのね。

世話娘。あの、わたしに。どうして。

妻。お前さんが内へ来て、ミルラを親代りに世話をして下さつたのぢやありませんか。大層親切に世話をして下さつて、教育にまで氣を付けて下さつたのを、わたしは聞いて知つてゐますの。

世話娘。まあ、そんなに言はれては却て痛み入りますのね。

(この問答の間。使屋と女中とにて、入口の戸と客間の戸との間を幾度も往返して、客間へ荷物を運ぶ。ミルラ、エデトの二人前房の戸口より登場。その時妻は園の方を背にして立ちゐるゆるゆる入り来る二人の子を直ぐには見ず。主人一二歩ミルラの方へ歩み寄る。)

妻。おや。あなた跛をお引きなさるのね。

主人。うむ。己は片羽になつたのだ。お前はまだ知らなかつたのかい。

妻。(興奮したる様子。)まあ、どうなすつたの。

主人。あの時なつたのだ。

妻。あの時なの。(分かりたる様子。)まあ、あの時なのですわね。

少女。(そつと主人に。)お父うさん。あの奥さんはごなたなの。

主人。分らないかい。

妻。(振り向き、徐かに。)ミルラや。

少女。(忽然叫ぶ。)お母あさん。(抱き付く。)

妻。(泣いたり笑つたりする。)逢ひたかつた事ね。もうお前を離す事は出来なくつてよ。そんな事があつても。

少女。(これも泣いたり笑つたりする。)お母あさん、嬉しいぢやありませんか。どうして歸つて來られたの。

妻。(やはり上の態度にて。)もうお母あさんはどこへも行かないよ。どこへも行かずにミルラの所にあるのだよ。

少女。(上の態度にて。)いつまでもね、いつまでもね。

妻。(同上。)いつまでも外へ行くものかね。

少女。(同上。)ああお母あさん。わたしあんまり嬉しくて嬉しくて死んでしまひさうよ。

妻。(同上。)もうこれからはお父うさんとお前と三人で楽しく暮らませうね。

少女。(同上。)わたしあんまり嬉しくて、まだ何が何やら分かりませんの。

妻。(同上。)さうだらう、さうだらう。まるで夢のやうだからね。まあ、大きくなつたぢやないか。

少女。夢ぢやあないでせうか。本當でせうか。夢かも知れないと思ふわ。

夢ならどうぞ覺めないやうにして下さい。わたしはこんなに嬉しいと、病氣になつてよ。

妻。(頭を摩づ。)まあ、なんといふ綺麗な髪になつたのだらう。(間。)それに色も白くなつた事ね。

孤兒。(主人に。)をぢさん。この方があなたの奥さんなの。

主人。うむ。これがサビイネをばさんだよ。

妻。(主人に。)これがオオエルベツクさんの子なのでせうね。さうでせう。

主人。(ぎくりとする。)どうしてそれを知つてゐるのだ。

妻。え、わたくしはその話を聞きましたの。舟が沈没してワルテルもルイイゼも死んでしまつて、可哀さうにこの子が一人助かつたといふのでせう。

主人。そんな事を誰がお前に話して聞かせたのだい。

妻。病院に這入つてゐた人の内に、好く知つてゐた人がゐましたの。(間。)まあ、それはそれとして、わたしはちよつと手水を使つて着物を着替へて來ませうね。汽車で旅をすると、真黒になるのですから。

女中。(左奥の戸を指さす。)奥様。お荷物はあのお部屋にございます。

妻。(主人に。)おや。あなた、今はあのお部屋でお休なさるの。

主人。いや。寝るのは、やつぱりいつもの所だ。

妻。そんならなせでせう。

主人。(吃りつと。)ロオゼンベルトが手紙で云つてよこしたが、さうした方

が好いといふ事だ。少なくとも當分の間は。

妻。まあなせでせう。わたしには分かりませんわ。

主人。それにあつちの部屋は日もあたり過ぎるから。

妻。でもわたしは日の好くあたる所が好きですの。(問)この部屋は元客間だったのでせう。

少女。今だつてさうなのよ。

妻。(疲れ果て、諦めたるやうなる調子)さういふわけならわたしはその部屋へ行きますせう。(問)あなたそんなに跛を引くやうにおなりなすつて、まあさぞ御不自由でございませうね。

(妻は少女に導かれて左奥の戸口より退場。○幕)

第二幕

床は前幕の通。少女ミルラ左奥の客間より出で来て、跡の戸を徐かに鎖す。直ぐに右前の戸開きて、主人アンセルム覗き込む。主人は半分だけ紙を切り

開けたる書物と紙切小刀とを手に持ちあふる。

主人。(少女に)どうしたい。

少女。お母あさんは横におなりなすつたの。

主人。寐るのかい。

少女。いゝえ。只少し一人で休んでおたいと仰やるの。わたしにも一時間してから又来いと仰やつてよ。なんでも汽車でお草臥なすつたのでせう。

(主人我が部屋に歸り去らんとす。)

少女。(はにかみつゝ近寄る)お父うさん。

主人。(本を置く)なんだい。

少女。(主人を右手長椅子に連れ行く)ねえ。お父うさん。今日は飛行機を飛ばす事はよすのでせう。

主人。(長椅子に腰を懸く)どうもそんな事は出来ないよ。

少女。だつてお母あさんが歸つて入らつじやつたばかりではありませんか。



主人。もう今になつてはよす譯には行かないよ。  
少女。行きますとも。只お父うさんがよさうと思はないのだけ。  
主人。さうではないよ。今になつて委員の人に断つてやる譯には行かない。

少女。でもそんな事をなさるとお母あさんが悪くお思ひでせう。

主人。どうも爲方がないな。今日午から大學の先生が来てゐる間、お前は  
お母あさんと一しよに散歩をして来れば好い。もうお母あさんは飛行機の  
事を知つてゐるかい。

少女。わたしが話したの。(間)お父うさん。あなたお母あさんの歸つた  
のが嬉しくつて。

主人。妙な事を聞く子だなあ。當りまへさ。嬉しくなくつて。

少女。でもお父うさんはちつとも嬉しさうぢやないわ。

主人。己がか。なんだつてそんな事を思ふのだ。

少女。でもお母あさんが這入つて入らつじやつた時、お父うさんはびつこ

りしたやうな顔をしたわ。

主人。妙な事をいふ子だなあ。それはお前がさう思つたのだ。己だつて  
不意に歸られたから、びつくりしたには違ひない。それでも嬉しい事は嬉し  
いのだ。それは當りまへぢやないか。

少女。ねえ、お父うさん。云つて聞かして頂戴よ。

主人。何を。

少女。なんでもないわ。

主人。なんだかさう云へよ。

少女。お父うさんどう思つて。エンミイをばさんはこのまゝお内にある  
でせうか。

主人。それは今は分からない。どうかなるだらうよ。

少女。お父うさんはをばさんがこのまゝゐると思つて入らつじやるの。

主人。まあ差當りゐるだらうよ。お母あさんはまだ中々體を使ふわけに  
は行かないからな。どうせ誰か内にゐて、内の事をしたり、お前なんぞの世話

をしてやらなくつちやあ。

少女。ねえお父うさん。

主人。なんだい。

少女。をばさんがこのまよゐるのならお母あさんに何もかも打ち明けて云つておしまひなさらなくてはならないでせう。

主人。(ぎつくりして)何を打ち明けるのだい。

少女。何もかも打ち明けなくてはいけないうでせう。それがお父うさんの義務だと思ふわ。

主人。(ためらひつゝ)何もかもといふのはそれはなんの事だい。

少女。何もかも本當の事を仰やるが好いといふのですわ。

主人。今日はお前は妙な事を云ふね。本當の事とはどんな事だい。

少女。あら。お父うさん分かつてゐる癖に。

主人。いや。どうも己には分からないがなあ。

少女。あら。厭なお父うさんだ事。そんな事をいふものではないわ。そ

れは卑怯だわ。随分卑怯だわ。

主人。何がかい。

少女。そんなしらばくれて。分かつてゐる事を分からない振なんかして。

お父うさんはわたくしの云ふ事がすつかり分かつてお出での癖に。

主人。妙だなあ。なんの事を云ふのだらう。

少女。それなら申しますわ。エヂトの事なの。

主人。(表向重荷を卸したるやうなる素振をする)なんの事だ。その事かい。エヂトを内へ入れたといふ事かい。お前はそれをお母あさんがなんぞか思ふと思つてゐるのかい。そんな事はお母あさんはとづくに知つてゐるのだ。病院にゐる時に人に話して聞かされたことさつきも云つたのを、お前も聞いてゐたぢやないか。エヂトの両親が難船をして亡くなつたといふ事も。

少女。いゝえ。その事ではなくつてよ。

主人。その事ではなくて、どの事だい。

少女。だつて口には云はれない事なのですもの。

主人。(少女の顔を凝視す。)何を云ふのだい。  
 少女。わたしお父うさんが自分の子の前で耻ぢて入らつじやるのを見るのがつらくてよ。

主人。そんな譯はないぢやないか。

少女。なせそんな事を仰やるの。無駄ですわ。どうせわたしは何もかも知つてゐるのですから。

主人。何を知つてゐるといふのだい。

少女。エヂトはわたしの妹でせう。

主人。そんな事を知つてゐるかい。(間。)そしていつから。

少女。もうすつと前からだわ。

主人。あゝ。

(主人両手にて顔を覆ふ。)

少女。ねえお父うさん。わたしあなたのそんなにして入らつじやるのを見るお可哀相でならないわ。お父うさんは本當に苦勞して入らつじやる

のね。そしてお母あさんだつて苦勞してゐますわ。まあわたしはどうしたら好いでせう。わたしはお母あさんとあなたが可哀くつて可哀くつてならないのですもの。なんともかとも云はれないほど可哀く思つてゐるのですもの。ねえお父うさん。あなただつてわたしの心は分かるでせう。わたしはどうぞあなた方お二人を幸福にして上げたいと思ひますけど、どうして好いかわたしには分かりませんわ。

主人。(興奮したる様子。)そしてお母あさんも知つてゐるかい。

少女。いゝえ。お母あさんはまだ夢にも御存じないのですわ。ですからあなたが云つて聞かせなくてはならないでせう。ねえさうしなくてはならないでせう。さうすべき筈なのでせう。

主人。一體お前は どうしてそんな事が分かつたのだ。

少女。(切れ切れに。)初めは只かうだらうと察してゐましたの。それから。(間。)そんな事は どうでも好いでせう。そんな事はわたし云ひたくないわ。

主人。まあ、好い子だから己の云ふ事を聞いてくれい。只一つ己に誓つて

置いてくれい。

少女。(問の調子にて。)ええ。

主人。お母あさんに一言でも云ふのではないよ。それを己に誓つて置いてくれい。

少女。それではやつぱり隠し立をなさるのね。(問。)非を遂げようとなさるのね。(問。)それではお心持が悪いでせう。(問。)お父うさんだつてそんな事は我慢が爲切れないでせう。

主人。お母あさんには己が云ふ。

少女。(さも喜ばしげに主人に接吻す。)まあ。それを云つて下さるの。本たうにわたし嬉しいわ。

主人。己が自分で云ふ。併しまあ(問)ゆる／＼でなくつちやあいけない。お前なんぞはまだ若い。それにお前のやうに神経質ではいけない。お前も思つて見るが好い。お母あさんはまだ病氣上がりだ。若しびつくりして又病氣が起らうもんなら。

少女。それは大變ですわ。

主人。それだて。お前だつてお母あさんが又入院するやうな事にしたくはないだらう。それ見ろ。だから己に任せて置けといふのだ。己なら場合を見て旨く云つて聞かせる。どうだ。お前が口を切らないといふ事を己に誓つてくれるだらうな。

少女。誓つてよ。ですがお父うさんあなたもわたしに誓つて貰ひたいわ。

主人。何をかい。

少女。をばさんにこの事を話さないといふ事を。

主人。なんだつて己がをばさんに。

少女。(悲しげに頭を振る。)だつてお父うさんはなんでもをばさんに云はずに置く事は出来ないのですもの。

主人。なんでも云つてもこれだけは云はない。どうぞ安心してゐてくれい。お母あさんはいつ起しに來いと云つたのだい。

少女。一時間立つたらと仰やつたの。

主人。(悪時計を見る。)それでは十二時頃だな。己もそれまでには歸つて来る。

少女。(詞緩く、さも不平らしく。)そんならお父うさんはお出掛けなさるの。

主人。なに。ちよつとホルストをぢさんの所へ行くのだ。

少女。(ぎくりとして。)お父うさんはをぢさんに。

主人。なに。そんなわけではない。飛行機の事を相談するのだ。

(主人入口の方より退場。少女暫く思ひに沈みゐる。さて贈物を載せるある卓に行き、書物の中の一冊を選び取り、前房の戸を開いて出でんとす。エンミイ右奥の部屋より登場。)

世話娘。(少女に。)表の戸が開いたのね。

少女。ええ。お父うさんがお出ましになつたの。

世話娘。どこへ行くかと仰やつて。

少女。ホルストをぢさんの所へ行くのだが、直ぐ歸るつて。

世話娘。お母あさんは寝てお出でだらうね。

少女。ええ。

世話娘。お前庭へ行つて本を読むのだらう。好いからお出で。

少女。(少し反抗する心持にて。)行きますとも。

世話娘。(呼び返す。)ミルラさん。

少女。(立留まる。)なに。

世話娘。わたしがお前に何をしたといふのだらう。

少女。(口を歪む。)なんにもなさらなくつてよ。

世話娘。なんだつてお前はわたしにといふと、そんな意地の悪い様子をするのだらう。

少女。意地の悪い様子なんかしないわ。

世話娘。そんなら今のやうな様子が優しい様子なの。

少女。わたしが何かしたかしら。

世話娘。何もわたしがお前さんに、出て行かせようとしたのぢやないではないか。

少女。さうでしたかね。でもわたしにはそんな風に思はれましたの。  
 世話娘。嘘だわ。お前にだつてさう思はれる筈がないのだがね。  
 少女。(肩を聳かす。)なんでもわたしのいふ事を嘘だと思ひなら。  
 世話娘。まあ、兎に角お前さんとわたしには、なせ仲好くは出来ないのだからね。

少女。(緩かに。)なせですか。

世話娘。わたしの方ではこんなにお前と仲好くしたいと思つてゐるのがお前には分からないのかねえ。

少女。(嘲る調子なしに。)それはお母あさんが歸つて入らつじやつたからでせう。

世話娘。まあ。お前はまるで蛇のやうな根性の子ね。

少女。(涙をぼろぼろ翻す。)どうぞ勘忍して頂戴よ。本心にわたしは悪いのね。どうも爲方がないわ。

世話娘。泣いたつて爲様がないよ。それで悪い處が直りはしない。好い

から本を持つて庭へお出で。

(少女園へ退場。世話娘あちこち歩きゐる。さて右前の卓の傍に腰を懸け、うつとりとなりて一冊の本を手に取り、びつくり返し見る。少女再び園より登場。)

少女。(忙はしげに世話娘に。)ごなたか庭の方から入らつじやつてよ。ハングルクから来たリッヒャルドをぢさんだと云つてくれといふの。

世話娘。まあ。あの人がどうして。(間。)お前お父うさんが留守だといふ事はさう云つたのだからね。

少女。ええ。それにお母あさんの寝て入らつじやるといふ事も云つたの。そしたらお母あさんを起すには及ばないをばさん、あなたに用があるのですつて。

世話娘。わたしに用だつて。まあ、どうしたといふのだらう。(間。)わたしは留守だとお云ひ。分かつたかい。早く行つて留守だとお云ひ。わたしは逢ひたくないのだから。

少女。もうそこへ入らつしやつてよ。

(リッヒャルド・ドエルハアゲン奥の方前房の戸口より登場。世話娘立ち上がり、左廊下の戸口へ行かんとす。リッヒャルドそれを遮るやうに進み寄る。世話娘は此場を去らんと欲して去ること能はざる様子。)

リッヒャルド。(世話娘に右手を出す。) エンミイさん。今日は。

世話娘。リッヒャルドさんですか。アンセルムは出掛けましたよ。

リッヒャルド。さうですつてね。近頃どうです。あなたには大分久しく逢ひませんでしたね。もう彼は十年になるでせう。

世話娘。アンセルムは向ひのロイカルドさんの所へ行きましたの。ちよつと呼んで参りませうか。

リッヒャルド。(遮り止む。) まあ待つて下さい。それには及びませんよ。

丁度好い。わたしはあなたに話がある。

世話娘。なんのお話です。

リッヒャルド。(少女に。) おい。お前は好い子だから少しあつちへ行つて

お出で。

(少女前房の戸口へ歩み寄る。)

世話娘。(激したる調子。) なせミルラをあつちへおやりなさるのです。(少女に。) ミルラ。行かなくつても好いよ。どうぞここにゐておくれ。

(少女園へ退場。)

世話娘。あなたとわたことの間には、あんな事があつて見ますれば、もうお互に何も申す事はない筈ではございませんか。

リッヒャルド。まあ、まあ。さういつたものではない。わたしが今日来たのは、何も悪い考で来たのではないから、どうぞそれだけは承知して置いて貰ひたい。

世話娘。そんならどういふお考でお出でなすつたのです。

リッヒャルド。お前の積りでは、己は云つて見れば、黒い男なのだ。ラ・ベエト・ノアアルだ。お前がそんな風に思つてゐるといふ事は、己の方でも知つてゐる。併しな、それはかん違へだよ。

世話娘。(嘲る調子。)さうですか。そしてなんの御用です。  
 リッヒャルド。己はアンセルムとサビイネとお前との爲を思つて来たのだ。お前の爲をも思つて来たのだよ。お前だつて己には(間)身近い人間だからな。

世話娘。さうでせうとも。あなたがわたしの爲を思つて下さるといふ事はたび／＼見せ付けて下さいましたよ。(間)その御恩は生涯忘れません。聖書のメッサレムのやうに年を取つてもわたしは忘れないのです。  
 リッヒャルド。ふん。併しな詞といふものは取りやうで悪くも取られるものだ。殊に手紙の詞はな。

世話娘。あなたはわたしにこの家を出て行けと云ひに来なすつたのでせう。

リッヒャルド。エンミイさん。サビイネが歸つたのですね。そこでわたしはあなたに忠告する。いや、あなたに願ふ。

世話娘。(相手の詞を遮り、激したる調子にて。)いえいえ。假令體が粉にな

つても。

リッヒャルド。お前の胸に問うて見るが好い。お前の理性に慙<sup>うらや</sup>へて見るが好い。どうもこの現状が維持せられるものではないぢやないか。

世話娘。さうなら、サビイネさんが出て行くが好いのです。誰があの人を呼び返したのです。アンセルムが爲には、わたしのゐる方が必要ですからね。  
 リッヒャルド。併しサビイネが退かないと云つたらどうする。サビイネは多分さういふだらうと思ふのだ。

世話娘。さうなればどうでも折合を付けるより外ないでせう。  
 リッヒャルド。ふん。お前だつてまさか眞面目にそんな事が出来ようとは思ふまいぢやないか。男一人に女二人だせ。アン・メナアジュ・ア・トロアといふやうなものが長く續くと思ふのかい。

世話娘。なせ續かないの。

リッヒャルド。そんならアンセルムはモルモン教徒にでもなつたといふのか。こなひだ興行になつた、シユミット・ポンの脚本のフォン・グライヘン伯



爵にでもなつたといふのかい。

世話娘。さうですね。あなたなんぞは何もかも平凡な世間並の道徳論で解釋しようとなさるのでせう。破格な場合があるといふ事は認められないのでせう。

リッヒャルド。ふん。最少数の人間の道徳を離れてしまへば、どの道徳も平凡だ。併しそれを己になせ云ふのだ。

世話娘。でもわたしはあなたのお手紙を読んでもます。

リッヒャルド。それでは字句に拘泥して讀んだのだ。一體それがどうして道徳に關係してゐるといふのだ。

世話娘。みな道徳論ですわ。

リッヒャルド。(頭を振る。)馬鹿な事を。少なくとも己は自分に對して道徳的な要求をした覚えはない。己はそんな世間見すではないからな。

世話娘。それにモルモン教徒だのなんだのと仰やるのね。それが道徳的標準を脱したお話でせうか。矛盾ですわ。

\*

リッヒャルド。矛盾なものか。道徳がどうのかうのといふ事はまあ置いて貰はう。道徳なんぞに關係はないんだから。誰でもてんでに自分の好いと思ふ事をしてゐるが好いのだ。土の中へ生けられてしまへば、誰も石塔にどんな事をして死んだといふ事を一々彫り付けはしない。それから百年も立つて見れば、その石塔もどうなつてしまふか分かりやあしない。己は今そんな事を彼は云ひに來たのではない。己は打ち遣つて置くよ飛んだ事が出來さうだからならう事ならお前達を助けてやりたいと思つて來たのだ。

世話娘。はてね。その飛んだ事といふのは、どんな事か知りませんが、わたしにはどうもそんな大事が出來さうには思はれないのです。

リッヒャルド。それが考物なのだ。

世話娘。ではあなたは、サビイネさんが又入院でもするやうになりはすまいかと思ふのですね。

リッヒャルド。お前の言つてゐる事を聞くと、ひどく残酷に聞えるのだ。己はサビイネが事を氣にするのではない。サビイネの體はもう鱗のいつた

硝子のやうなものだ。サビイネの不幸はもう過去に屬してゐる。己の氣にするのはお前達の身の上なのだ。お前達は橋の架けられない谷川へ無理に橋を架けようとしてゐるやうなものだ。よしやお前とアンセルムとが意地強くやつて行くとしても、子供等がひどい目に逢ふ。子供が犠牲になつては可哀相ぢやあないか。そんな境遇に置かれると、子供が一番つらい目を見るものだからな。

世話娘。あなたの子供といふのはミルラの事でせうね。

リッピヤルド。さうだ。己はミルラといふ子の事を今迄はなんとも思つてゐなかつたが、それ、あのさつきの様子を見るが好い。お前がそこにゐてくれると云ふのに、わざとこの場を外してしまつた。己はあの様子を見てはつと思つた。あねからといふものは、己はミルラといふ娘を計算の外に置く事は出来ないのだ。この一家の問題を解決しようといふ段になると、ミルラについて大いに考へなくちやならないのだ。

世話娘。そんならあなたは、わたしの生涯をミルラが爲に犠牲に供しよう

となさるのね。わたしだつて一人前の人間ですわ。わたしも生活しようと思ふのです。わたしの享けられるだけの幸福を享けようと思ふのです。

リッピヤルド。だがな、自分を犠牲に供するといふ事も幸福の一つだ。間に依つたら人生の幸福の最も大なるものかも知れない。どうぞ能く考へて見て貰ひたいものだ。己がお前に頼むがな。

世話娘。(激したる調子。)いえ、いえ。眞平です。わたしはアンセルムさんに對しては、ミルラよりもサビイネよりも前から権利を持つてゐます。サビイネ母子があの人爲に何をしました。わたしがあの人爲に何をしたとお思ひです。わたしは何もかもあの人に遣つてしまひました。我が身の若さも、世の聞えも、財産も。その代りアンセルムさんはわたしがゐなくては、生きてゐる事も出来ず、事業をする事も出来ないのを、わたしはちやんと知つてゐます。

リッピヤルド。ふん。その事業だがな。それはもう早晚諦めてしまはなくてはなるまいて。

世話娘。それはなせでせう。

リッヒャルド。まあよく考へて見るが好い。あの發明でドエルハアゲン家の財政困難が恢復出來ようと思ふのかい。

世話娘。それは無論出來ますわ。あの發明が成功すれば何百萬といふお金が這入る筈ですもの。

リッヒャルド。そりやあアンセルムはさう云つてゐるさ。そしてお前はその言草の口眞似をしてゐるさ。處がな己の聞いて見た處ではその道のものは首を振つてゐるのだせ。

世話娘。それはさうかも知れませんが、わたくし共が間違つてゐるか、その首を振つてゐる人が間違つてゐるか、今日の中に分かるのです。

リッヒャルド。ふん。お前は己が二週間前にこの内へ來た事を知つてゐるだらうな。何年も無沙汰をして久し振で來たのだつた。あの時己がアンセルムに相談をした事がある。

世話娘。アンセルムさんはそのあなたの御相談には乗らなかつたではあ

りませんか。

リッヒャルド。それは乗らなかつた。生憎お前が留守だつたのに、己はお前を待つてゐる時間が無かつた。こゝへ來た翌日は早朝にブダベストの總會へ出席しなくてはならなかつたのだ。それさへなけりやあ、己はお前に話したのだ。さうしたらアンセルムも厭とは云はなかつたかも知れない。間いや、アンセルムはきつと己に同意した。アンセルムは遅いか早いか己に同意せずにはゐられないのだ。

世話娘。(嘲る調子) まあ妙な事を考へてお出でなさるのね。そしてわたしの財産はさうして貰はれるといふのです。

リッヒャルド。それはお前の一錢五厘も損をしないやうに入れ戻してやるのだ。

世話娘。それではあなたが返して下さるといふのね。思召しは難有いがまあ御免蒙りませう。あなたからお金を戴く程なら、わたし身を投げて死んでも好いわ。

リッピヤルド。(少し間を置く)己は何をいほうと思つたのだつけ。おう、さう、さう。さつきお前はアンセルムに對しては自分が一番古くから権利を持つてゐるの、アンセルムは自分なしには事業をする事が出来ないの云つてゐたやうだつたが、アンセルムの方で實際そんな風に考へてゐるか知らんて。(間)成程、アンセルムが最初の戀人はお前だつたが、お前を無くしてから、の諦めやうは随分早かつたやうだ。それからサビイネを妻に持つてから夫婦の間は大分仲が好かつたといふ事ぢやないか。

世話娘。そんな事はないわ。サビイネさんは持病のヒステリイで、随分アンセルムさんをいぢめたのですから。アンセルムさんがわたしに話しましたわ。

リッピヤルド。そりやあさう云つたかも知れないよ。併し人は自分で自分の言分けをする事があるものだ。それに人の記憶といふものは好い方へも悪い方へも伸び縮みの出来る弾力を持つてゐるものだからな。そりやあゝ、愈々精神病になる二三週間前なんぞは、サビイネも随分神経質になつてゐた

には違ひない。併しそれより前がどうだつたか知らん。己は度々この内へ呼ばれて来て夫婦の様子を見た事がある。ひどく仲がよかつたせ。(間)今病氣が直つて歸つて来て見れば、又元のやうにならないにも限らないぢやないか。

世話娘。でもアンセルムさんがそんな不實な人でない事はわたしが知つてゐますわ。

リッピヤルド。人を知つてゐるなんぞといふ事がさう造作なく云はれたものぢやない。よしや毎日毎日鼻を突合せてゐたからといつて、人の腹の底が分かるものかい。人のぢやあない。自分で自分の腹の底も中々分らないものだ。それにアンセルムも事によるさうつかりして、意識せずに危険な迫門に乗出したのかも知れない。なせといふに、若し意識してゐたのなら、こんな事にならないうちに、防ぐ手段もある筈だから。

世話娘。何を防ぐといふのです。

リッピヤルド。それはお前を旅に立たせて置くとか、サビイネに退院の日

延をさせるとか、どうにでもならうぢやないか。

世話娘。だつてサビイネさんの歸るといふ事は、アンセルムさんもまるで知らなかつたのです。自分でも途方に暮れてゐたのですもの。

リッヒヤルド。馬鹿を云へ。知つてゐたのだ。

世話娘。なんにも知つてはゐませんわ。夢にも知らなかつたのですわ。

リッヒヤルド。ふん。それぢやあつともお前に知らせて置かなかつたのだな。

世話娘。何をです。

リッヒヤルド。もう二週間も前の事だつた。己は病院に會ひに行つて歸つて来てアンセルムに話したのだ。もう全治したも同様だから程なく退院する事になるだらうと、はつきり云つて聞かしたのだ。

世話娘。あの二週間前に。

リッヒヤルド。さうだ。おまけにその己の知らした事が初耳でもなかつたらしい。それより前に院長ロオゼンベルヒが大抵な様子は手紙で知らせ

て置いたといふから。

世話娘。まあ。あなたの今云ふ事は本當なの。

リッヒヤルド。アンセルムはなんにも云つて聞かせないのかい。

世話娘。なんにも云ひませんわ。一言も。

リッヒヤルド。はてな。それぢやあサビイネが歸るといつたら、何かお前が邪魔でもするだらうと思つたのだらうよ。

世話娘。まあ、わたし呆れてしまふわ。(世話娘泣く。)リッヒヤルド。(工合の悪き様子。)まあ。泣く事はよせよ。

世話娘。(少し氣を鎮む。)どうもわたしには分かりませんわ。どうしたといふのでせう。なせわたしに隠してゐたのでせう。

リッヒヤルド。ふん。もつとお前に隠してゐる事があるかも知れないせ。

世話娘。(激したる様子。)まだ隠してゐるとは何を隠してゐるのでせう。

リッヒヤルド。まあ。あの男が財政上にごの位窮境に陥つてゐるといふ事もお前には分かつてゐまいね。それも只身代限に近いといふだけならま

だ。好い。怪しい爲替で取引をしたり何かして、刑法にも觸れさうになつてゐるのだからな。

世話娘。あの刑法に。まあ。アンセルムさんのなさる事はなんでもわたしが知つてゐる筈なのに。

リッヒャルド。そこが女だよ。この事件が破裂して法廷へ出る段になると、アンセルムは随分ひどい目に逢はなくつちやあなるまい。さうさな。(問)悪くすると懲役だな。

世話娘。(びつくりする)あの懲役にアンセルムさんが。

リッヒャルド。きやうだいの事をかういふとをかしいが、あいつは危険な性質を持つてゐる。一旦かうと思ひ立つた事業の爲めにはどんな手段をも取り兼ねない男だからな。

世話娘。アンセルムさんが懲役に。(泣く)

リッヒャルド。お前にこんな事を云つて聞かせるのは實に己もつらいのだが。

世話娘。(泣聲にて)なんのあなたにづらいものですか。それは嘘ですわ。わたしがこんな境遇に陥つたといふのが、さぞあなたは嬉しいでせう。

リッヒャルド。途方もない。己をそんな人間と思ふのかい。

世話娘。分かつてゐますわ。言分けなぞをなすつたつて駄目ですわ。(問)あなたがわたしを敵にしてひどい目に逢はせようとしてお出でなさるのはわたしにはよく分かつてゐます。血を見るまでは止まないといふ御決心なのでせう。今その時が來たのですね。わたしはあなたに泣いて見せます。さあ。たんと喜んで下さいまし。

リッヒャルド。(激したる様子にて、あちこち歩く)おい。エンミイ。そりやあ己がお前に對して冷淡な、残酷な爲打をした事もある。それがお前に分らないか。ええ。分らないかい。それを云つて聞かせろといふのかい。おい。己はお前に最初から冷淡だつたのではないぞ。

世話娘。(泣き止んで顔を上げ、口惜しげに)ええ。それは最初からではありませんとも。さうでなかつた時もありますわ。だが、なんだつてそんな事

を今になつて云ふのです。

リッヒャルド。心理上の説明にならうかと思ふのだ。

世話娘。あなたの憎みを心理上に説明するといふのですね。(間)わたしがあなたの申込みを拒絶してあなたのきやうだいと結婚したからだといふのですね。

リッヒャルド。いや。それは違ふ。己はそんな人間ではない。

世話娘。そんならなせだといふのですか。

リッヒャルド。アンセルムがお前に愛せられてゐながら、お前を妻に持たなかつた時に。

世話娘。(急に詞を遮る。)お待ちなさい。妻に持たなかつたのではないのです。持つ事が出来なかつたのです。

リッヒャルド。(頭を振る。)持つ事が出来なかつたのではない。

世話娘。いふえさうです。事業の目的の爲に、幸福を犠牲に供したのです。サビイネさんには財産がある。わたしにはそれが無かつたのです。あの時

はわたしはまだ遺産を受取つてゐなかつたのです。

リッヒャルド。その幸福を犠牲に供したといふ事業がなんだい。馬鹿氣切つてゐる。(間)まあ。そんな事はごうでも好い。アンセルムがお前と切れた時は、己はもうごうする事も出来なかつた。己はもうベルタといふ妻が出来てゐた。

世話娘。(斥くる如く。)奥さんが出来てゐなかつたら、わたしを妻に爲たごでもいふのでせうか。

リッヒャルド。それは爲たかも知れないぢやないか。(間)そんな事はごうでも好い。お前がアンセルムの妻になつてからは己は二人の幸福を祈つたのだぞ。

世話娘。(嘲る調子。)まあ、御親切様な事ね。

リッヒャルド。そんな口ぎたない事をいふものではない。己は眞面目な話をするのだ。(間)そこでお前は一人身である。その内サビイネが發狂して、お前がこの内へ乗り込んだのだ。それが己には我慢が出来ないのだ。

世話娘。そんならあなたは嫉妬をするといふのですね。

リッヒャルド。嫉妬ともなんとも勝手な名を付けるが好い。己は嫉妬といふものとは思はない。その時は己はお前に大分遠ざかつてゐた。己の心のすつと底にお前といふものの幽な記念の肖像があつた。その肖像が穢れたのだ。これが外の女ならなんの不思議もない事だが、お前といふものがそんな事を爲ようとはどうも己には思はれなかつたのだ。

世話娘。わたしがここに這入つて来てどうしたといふのですか。

リッヒャルド。夫婦でない夫婦になつて、一じやうを送らせるのが見てゐられないと思ふのだ。

世話娘。でも獻身者になつたものは、受けた手剣に誇るのです。そしてわたしを獻身者には誰がしました。(間)そこであなたは御自分の記憶の底の肖像を穢したくないといふので、それでわたしをアンセルムさんから引き放さうとなさるのですね。

リッヒャルド。さうだ。さつきも云つた通りだ。

世話娘。そしてそれをなさりにお出でなさつたのですね。

リッヒャルド。さういつた許りでは己の心持に協つてゐない。己はお前達を助けに來たのだ。お前達の身の上の禍を除きに來たのだ。この間際になつても好いから、己はアンセルムに話して見たい。無論極く平和に話して見るのだ。兎に角あの飛行機騒ぎを止めさせる。もう大概にしたが好いのだ。

世話娘。(物を案ずる様子) そのあなたのなさらうと云つてゐる事は、アンセルムさんの爲ではないのですね。(間) あなたの記念の肖像の爲めです。その爲めにこの家をわたしは出なくてはならないのですね。

リッヒャルド。さうだ。それも必要な一條件だ。

世話娘。ほんに、事によつたらこの家をわたしの方から出まいものでもございませぬ。そんな事をわたしに隠して黙つてゐられたものと見れば、わたしも出る氣にならないにも限りませぬ。併しわたしにはまだなんとも極めては考へられませんわ。兎に角あなたはアンセルムさんに話すといふので



すが、そんな事は駄目ですわ。アンセルムさんの強情な處をあなたはまだ知らないのです。又よしやアンセルムさんは心の中では止さうと思ふやうになつても、わたしに對しての意地があるから、きつと止すとは云ひません。さうして見ればこの事がどうなるかはわたしの手の内にあるのです。リッピヤルドさん、どうぞあなたはその話をアンセルムさんにするのを止してわたしに話させては下さいませんか。

リッピヤルド。ふん。それぢやあお前が説き付けて見ようといふのか。

世話娘。わたしにもまだどうなるかはつきりとは分かりません。わたしがどうしようと思ふか、それさへまだ分かりません。事によつたらあの方を助ける爲めにわたしが犠牲になつても好い。事によつたら犠牲になつて上げる程の價值があの方にはないかも知れない。何が何やらわたしにはまだはつきりとは分かりません。併し兎に角あの方を説き付けるといふ事はわたしより外の人には出来ないだらうと思つてゐます。

リッピヤルド。(立ち上がる。)ふん。よからう。お前のいふ通かも知れな

い。己の口から云ひ出しては、きやうだい喧嘩になるかも知れない。お前が話して見ても好いが、今日の内に己の所へ吉左右を知らしてくれい。己は夜の十一時の汽車で立つのだ。

世話娘。明日までは延ばされないのでですか。

リッピヤルド。どうもさうはならないのだ。十時三十分までならサライ・ホテルに泊つてゐる。

世話娘。どうなるか知れないけれど、その時刻までに内の女ちゆうをホテルまでやりませう。

リッピヤルド。(握手す。)そんなら返事を待つてゐるせ。切斷をするといふ事は醫者の身でもつらい爲事だ。痛い目に逢はせれば憎がられるのは知れてゐる。併し切斷をしてやるのは病人の爲めだから爲方がない。アンセルムといふ男がどうなつても好いと思ふやあ己は知らん顔をして見てゐるのだ。

世話娘。そんなら十時半までに。

リッヒャルド。うむ。十時半まで待つてゐる。アンセルムに宜しく云つてくれい。

(リッヒャルド入口の戸より退場。世話娘又泣き出だす。世話娘は右手卓の側に坐し、卓の縁に臂を突き、手に額を載せ、折々聲を立て泣く。暫くして左奥の戸開き、客間より妻登場。戸の開く音にて、世話娘はハシケチを隠し、側なる本を取りて翻へしを、れども、妻は世話娘の泣きゐたるに氣付き、親切に右手より近寄る。)

妻。エンミイさんどうしたの。

世話娘。どうもしませんわ。なせそんな事を仰やるの。

妻。でも泣いてゐるぢやありませんか。

世話娘。あら。泣いてなんぞゐるものですか。

妻。でもわたし見ましたわ。

世話娘。何か目の中へ這入つたものですから、無暗に目をこすつてゐましたの。

妻。内のがこゝに參つてゐたのではございませんか。

世話娘。いええ。

妻。でも男の聲がしたちやありませんか。

世話娘。お客がありましたの。

妻。ごなた。

世話娘。ごきやうだいのリッヒャルドさんでした。

妻。あゝさうでしたか。そしてもうお歸りなさいましたの。

世話娘。ええ。ごここにお約束があるのだからさうですて。

妻。まあ。失禮をいたしました事ね。なせミルラがわたしを起してくれなかつたのでせう。

世話娘。わたしもさう思ひましたから、ミルラさんにいつて見ましたら、あなたに静かして置いてくれと仰やつたとさう云ひましたの。

妻。あのちよつと待つてゐて下さいよ。直ぐ來ますから。

(妻忙がしげに客間に入り、間もなく再び登場。手にはプロオチの入り

たる箱を開けて持ちゐる。

あなたこのプロオチを知つてゐますでせう。

世話娘。ええ、覚えてゐますわ。

妻。さうでせう。これは母の形見なのです。八年ばかり前にあなたが見て、大層好いと云つて褒めた事があるでせう。

世話娘。ええ。今拜見しても本當に好うございますわ。

妻。(殆ど謙遜なる態度にて。)あの今でもお厭でないならわたしこれを上げたいのですが。

世話娘。まあ。

妻。お厭ではないでせう。

世話娘。でもそんな事を。

妻。いええ。さういはないで取つて下さいな。

世話娘。いえいえ。それは決して戴かれませんか。

妻。なせなの。わたしはね、あの病院にゐた時から、若し直つて歸つたらあ

あなたのお氣に入つてゐるこのプロオチを上げたいと不断思つてゐましたの。もうさう思つてから一年餘りになりますわ。あなたがミルラに優しくして下さるといふ事を、人の話に聞いた時、わたしはさうしようと思ひましたの。母の亡くなつてしまつたあの子の爲めに、あなたが母になつた氣で、面倒を見て下さつたのでせう。(間。)さうぢやありませんか。そんな事のお禮が品物やなんぞで出来ないといふ事はわたしにだつて分かつてゐますが、これはほんのお禮のしるしですから、どうぞさういはないで貰つて下さいな。

世話娘。いええ。そんな事は出来ませんわ。あなたのお母あ様の形見だといふ事を知つてゐながら。

妻。それはわたしの母の形見だから上げたいといふのですわ。わたしの一番大事なものだから上げようといふのですわ。ねえ、エンミイさん。そんな事を云はないで貰つて下さるでせうね。

世話娘。どうもそれは出来ません。どう思つて見ましても。

妻。だつてそれではわたしの氣が濟まないのですもの。

世話娘。さうですか。そんなら爲方がありませんからわたしを戴きますわ。

妻。(嬉しげに)そんなら貰つて下さるのね。

世話娘。(感動したる様子)貰つて上げればあなたのお氣が休まるといふ事なら兎も角も戴きませう。ほんとにあなたは心の優しい方ね。難有うよ。

(世話娘妻に接吻す。)

妻。なにこれん計りの物を。ざれ。ちよつと襟に付けて見ませう。まあ好く似合ふ事。(間)それはさうミルラはどこへ参りましたの。

世話娘。庭で本を讀んでおいでの筈です。ちよつと呼んで來ませうか。妻。いゝえ。そんならわたしが行きますわ。あなたも來なくつて。

世話娘。いゝえ。わたしは勝手に爲掛けて置いた事がございますの。

(妻は園へ退場。世話娘左手廊下の戸口より出でんとして、主人の歸り來たる足音を聞き付け立ち留まる。主人左前の入口の戸より登場。)

主人。(入り掛かる)サビイネはまだ寐てゐるかい。

世話娘。いゝえ。今庭の方へいらつしやいましたの。(間)あのわたしは御都合の好い時あなたに少し話したい事があるのですが。

主人。(右手卓の側に坐す)己もお前に話したい事があるのだ。今ではどうだらう。

世話娘。今は用事がございますの。それにサビイネさんが庭から歸つて來ますからね。

主人。お前の話といふのはなんだい。何事かあつたのかい。

世話娘。いゝえ。なんにもあつたのではございません。(間)先刻リッヒヤルドさんが入らつしやいましたの。

主人。リッヒヤルドが來たつて。お前逢つたのかい。

世話娘。えゝ。

主人。妙ぢやないか。なせ己が歸るまで待つてゐないのだらう。

世話娘。何か御用の都合でゆつくりしてはゐられないと仰やいましたの。主人。ふん。逢はない方が却て好かつたかも知れない。(間)お前逢つて

色々話をしたのかい。

世話娘。いふえ。ほんのちよいと計り。

主人。何か筋の込み入った事を話したかい。(間)一體何事なのだ。なんだか事ありげな様子をしてゐるではないか。

世話娘。跡で申しますわ。唯今は勝手に用事がございますから。

主人。それは跡なら跡でも好いが、なんの話だか、それだけ聞きたいものだがなあ。

世話娘。ちよつと一口には申されせんわ、あの、リッヒャルドさんが相談があると仰やいましたの。

主人。その相談といふのは己にどうしろとかいふ相談なのかい。

世話娘。ええ。あなたがどうかなさならなくつてはならないやうになりさうでございますの。

主人。己とお前とを引き分けようといふのではあるまいな。

世話娘。その事もございますの。

主人。大方リッヒャルドの事だから、そんな事をお前に吹き込んだのだからと思つたよ。

世話娘。わたしはリッヒャルドさんのお話が氣に掛かりまして。

主人。さうだらう。お前の心配するやうな事を云つたに違ひない。いやに物を悲觀する男だから。併しお前がそれを取り上げるといふ事があるものか。

世話娘。あなたのなすつていらつしやる事業が失敗になつてしまひましたら。(間)あなたが法廷へお出になるやうになりました。

主人。ふん。よしやそんな事があるとしても。(間)プロメテウスは鎖に繋がれた。それは人間世界へ光明を持つて來ようとしたからだ。

世話娘。(激しく感動したる様子にて、主人に抱き付く)わたしはあなたを信じてゐますわ。あなたの使命を信じてゐますわ。

主人。おい。聞いてくれい。これまで己の發明を疑つた事はあるまいな。世話娘。そんな事はありませんわ。あなたもそれは御承知の癖に。

主人。うむ。お前の心は知つてゐる。それだ。それに、もうたつた二三時間、己の事業が完成しようといふのに、今になつて成功を危ぶむといふ事があるものか。

世話娘。なんの危ぶむものですか。もう危ぶみは致しません。どんな事があつても。(間)併しその事は加しではございませんの。

主人。その外に何があるのだ。

世話娘。(たゆたひつと)あの、わたしは色々考へて見ましたがね、サビイネさんがあつて歸つていらつしやつて見れば、どうもわたしの方で身を引いた方が。

主人。それはなんといふ事だ。リッヒャルドの野郎、すつかりお前に毒を盛つたのだな。

世話娘。まあ飛んでもない。その事はわたし前から考へてゐましたの。

主人。それは餘計な妄想といふものだ。

世話娘。あの今朝早く、まだサビイネさんが歸つて來ない中に、わたしがさ

う申しましたでせう。どうぞサビイネさんを歸さないやうにして下さい、この内へ入れないやうにして下さいと、さう申しましたでせう。(間)あの時はわたし自分の事を案じるよりは、あなたの事を案じてさう申しましたの。サビイネさんは病氣をして、きつと姿も見悪くなつてお出でなされるに違ひない。あなたももうあの方と御一じよに暮りたいとお思ひなされるまい。あの人を歸さないで、あなたのお心持の好いやうに致さうと、さう思ひましたの。(間)本當にさう思ひましたの。それに歸つてお出でなすつたのを見ますと、大違ひですわ。こんな事を云ふのは變ですけれど、爲方ありません。ほんごにあの方にはわたしも惚れ惚れしましたの。歸つて來たらかうも爲よう、あゝも爲ようと思つたのが、まるであべこべになつてしまひましたの。どんなに憎まうと思つても憎む事が出來ませんの。あの方は恐ろしく悲しげな目付をしていらつしやいますのね。あの目付をもつと悲しげにする事は、どうしてもわたしには出來ませんの。それにまあなんといふ正直な優しい心で、わたしに物を仰やつたでせう。

主人。いふぢやないか。お前達二人がそんなに折合が好ければ。  
 世話娘。大違ひですわ。そんな事が出来ようなどとはどうぞ思はないで  
 下さいまし。そんな風だからわたしはこの内にゐられないといふのですわ。  
 長年病院にゐて歸つたのに、ちつとも年を取つたといふ所は見えませんが  
 う。あれで一じよにゐられては、あなたがどうもならずにはいらつしやらな  
 いに極まつてゐますわ。

主人。そんな事は決してない。

世話娘。あなたが今さう仰やるのはそれは真面目に仰やるのでせう。そ  
 れをわたしは疑ひは致しません。併しわたしはこの先の成行を見越して申  
 すのです。わたしにはなんとなくその成行が見えてゐます。サビイネさん  
 といふ方は、男の方が一じよにゐて只置くやうな女とは思はれません。わ  
 たしはそれが分かつてゐて、大事なあなたに御迷惑を掛けたくはありませ  
 ンから、それで身を引かうと申しますの。

主人。まあ、何を云ふのだい。成程、それは大變高尚な話で、立派な利他主義

のやうに聞えるが、(間)怒つてはいやだよ、どうも己はそんな言草を真面目に  
 聞いてはゐられない。己とお前の仲は、(間)さあ、なんのやうだといつて好い  
 か。ええ。どうでも好い。己の爲めにはお前といふものは無くてはならな  
 い人間だ。そしてサビイネはもうゐなくつても好い人間になつたのだ。こ  
 れは動かすべからざる事實だ。己は世の中にお前より身近いものはない。  
 (間)だからどうぞ餘計な心配をしないでくれい。サビイネに對しては、優し  
 くしてやらなくてはならないといふ事は、これも當然の事だ。それ以上の事  
 は決してないのだ。

世話娘。それはあなたがさう思つていらつしやるといふ事はわたしにも  
 分かります。けれどわたしはさうは出来ないと思ひますの。(間)あゝ。ほ  
 んにはんになんといふ悲しい事になりましたのでせう。悲しい事に。(主人  
 の胸に縋りて泣く。)

主人。おい。エンミイ。どうしたといふのだい。

世話娘。(主人の抱く手を放さんとす。)放して下さい。どうぞキスなんぞ

をして下さいますな。若しサビイネさんが来て見付けると悪うございますから。それに勝手に用がございますから。

(世話娘左手廊下の戸より退場。主人神経質なる手付にて時計の鎖をいぢりぬる。エヂト園より登場。)

孤兒。をぢさん。知つてゐて。

主人。(うつかりしてゐながら、半ば獨言のやうに。)知つてゐることも。雨が降れば濡れるものだ。

孤兒。まあ。をぢさんの馬鹿な事。そんなら降らなければ。(間。)そんな事ぢやないの。をぢさん。知つてゐて。

主人。(やはらうつかうこしてゐる。)何を。

孤兒。サビイネをばさんはわたし大好なの。

主人。さうかい。

孤兒。綺麗な方ね。あのお鼻が立派だわ。真直い立派なお鼻ねえ。エンミイをばさんのお鼻はあんなに立派ではないわ。

主人。さうかい。

孤兒。さうだわ。ですげんエンミイをばさんの方はむくむくしてゐて、頬つべたがとき色で綺麗だわ。エロニカがさういつてよ。林檎のやうですと。

(妻と少女と園より登場。)

妻。(喜ばしげに。)おやお歸りなさいましたね。

主人。たつた今歸つたのだ。ホルスト君がお前に宜しくと云つたつて。

午後には来る筈だ。

少女。お父うさん。リッヒヤルドをぢさんがさつき入らつじつてよ。

主人。さうだつてなあ。

少女。誰にお聞きになつて。

主人。をばさんがさういつたよ。

少女。さう。それではをばさんのお出でのうちにお歸りなすつたのね。

主人。(妻に。)ごんな工合だ。よく休まれたかい。

妻。ちよいとうとうとしましたの。それでも気分がはつきりしましたわ。



主人。どうだい。内に歸つて安心したかい。

妻。ええ、ええ。(問)今庭へ行つて昔馴染の植木を見て参りましたの。(問)あの催眠術に掛かつた人にトランススといふ事があるさうですね。わたしそんなやうな妙な氣持がしてゐますの。なんだかかう何年も外へ行つてゐたのではなくつて、つひ昨日あたりどこかへ行つて今日歸つて来たかといふやうな心持がしますの。何もかもちつとも前と變つてゐませんのですもの。丁度昔語の薔薇姫の話のやうにお城の中は、昔わたしが出た時のまゝに、そつくと變らぬにゐるのですもの。(只問)ピアノがあつちの方にありましたつね。あの動物とアンジェルとはどうしましたの。

主人。フェルナンド・クノツプフのかい。

少女。お母お様あすこにありますわ。元からあすこに掛けてあつたのよ。妻。さうさう。それに棕櫚の木が大きくなりましたのね。

主人。さうだつたな。あの時は丁度寒のひどい冬を越した所で、枯れさうになつてゐたのだつた。

孤兒。をばさん。わたし鳥の巢を持つてゐてよ。ひよつこが五つ道入つてゐるの。見せて上げませうか。

主人。人の話をしてゐる時そんなに出しやばるものではないよ。

妻。(孤兒の髪を摩る)そんなに小言なんぞを仰やらなくても好いではないですか。こんな好い子に。(問)それでもこの肖像畫は元からはなかつたのね。誰なの。エンミイさんではないでせう。

主人。似てゐないかい。

妻。さうね。少こはお世辭に好くかいてあるかも知れないのね。あら。あそこにお祖父さんの糞入があるのね。それにチツファニイのコップが。エデンハルへ二人で行つた記念品ですわ。またあの時の事を覚えていらつしやつて。まあよく壊れずにゐました事ね。(問)このクリンゲルはもう昔ほど面白くは思ひませんが、マグニフィカアトは好うございます事ね。(問)おや。スミルナの涙の壺がありましたわ。まだ覚えていらつしやつて。穢ならしいアルメニア人の店で、御一しよに買ひましたつたね。ほんにあの店

に這入つた時の變な匂つてございませんでしたね。(間) おう。まだあなたのお部屋に行つて見ませんわね。

主人。さうかい。

妻。(右前の戸の前にて) 這入つて見ても好うございますの。奥の院まで。まだ昔の時のやうな心持がしますわ。ファウストの書齋のやうですね。(間) あら。こゝにわたしの飛行機がありましたわ。まだこれを研究していらつしやるの。

主人。うむ。まだやつてゐるよ。前より餘程好くした積りだ。

孤兒。(妻に) ひかうきはあなたのぢやないわ。

妻。おや。この子は何を云ひましたの。

少女。(孤兒の袖を引く) お母あさん。なんにも云つたのぢやあなくつてよ。この子は出たらめばかり云ひますの。

妻。(主人に) まだ覚えていらつしやるでせう。この模型の初めて出来た時、これはお前のだと仰やいましたわね。これは己とお前と一じよに拵へた

のだとさう仰やいましたね。梯子を延ばした大きい分は、あの乗つてお落ちになつた分はあなたなので、この小さい模型はわたしのだと仰やいましたでせう。

主人。さうだつたよ。その模型はお前にやつたのだ。

孤兒。いゝえ。それはをぢさんがエンミイをばさんにお上げなすつたの。

少女。(妻に) 嘘だわ。あんな好い加減な事を云つて。(孤兒に小聲にて) 黙つてお出でよ。

主人。(妻に) 子供の云ふ事などを氣にしはすまいな。どうも小さくて何も分からないのだから。

孤兒。でもエンミイをばさんがさう云つたのだもの。

少女。(小聲にて) 好いから黙つてお出でよ。

妻。(孤兒に) あのエンミイをばさんがお前になんぞ云つたのだい。

孤兒。さう云つたの。それから今日の午からは、遠い遠い所から汽車に乗つて大勢偉い方が入らつしつて、をぢさんのひかうきに乗るのを御覽なさる

のですつて。

妻。(主人に。)この子の今云つてゐるのはなんの事でございますの。

主人。審査委員が来るといふのだ。

妻。まあ。そんならあなたは今日又飛行機にお乗りなさいますのね。あのいつかの飛行機に。

主人。いや、その後改良した分に乗るのだ。

妻。(機嫌を損じたる様子。)それではわたしの歸つて来た今日なのに、又飛行機にお乗りなさいますの。(間。)その審査委員に、今日だけは延期すると云つておやりになるわけには参りませんか。

主人。それはどうも出来ないよ。

妻。でもわたしがやつと歸つて来ましたその日ではございませんか。ホルストさんが来て見るのならそれは好うございますけれど、大勢の知らない方が。

少女。お父うさん。お母あさんが折角あんなに仰やるのですから電報を

打つて断つて下さいな。

主人。もう電報も間に合はない。お母あさんの歸る事を今日の夜明に知つたなら、まだ断る隙もあつたのだが。

妻。まあ。爲やうのない事ね。久し振で今日一日は水入らずで面白く暮したと思つて、楽しみにしてゐましたのに。

主人。お前は己が今日飛行機に乗るのをひどく氣に掛けるのかい。

妻。いとえ。そんな事はございせんわ。(間。)おう。さうさう。エヂトさん。鳥の巢を見せて下さるのでしたつね。

孤兒。ひよつこが五つ這入つてゐてよ。この位の小さいひよつこなの。

(拇指と示指とにて大きさを示す。)

妻。まあ、黄いろい嘴をしてゐるのでせうね。

孤兒。えと。そして障つて見ると温かいのよ。をばさん。見たくつて。

(孤兒は妻の手を取り園の方へ引き行く。)

妻。(微笑みつゝ主人に。)この通りですから一しよに行かなくてはなりま

せんの。待つてゐて下さいませ。直ぐに來ますから。

(妻と孤兒と園へ退場。)

少女。お母あ様がやつぱり氣持を悪くしたわ。

主人。さう思ふかい。

少女。お父うさん。

主人。なんだい。

少女。(機嫌を取るやうに微笑みつゝ)お父うさん。今ですよ。

主人。何が。

少女。お父うさん。もうお忘れなすつたの。それではあんまり忘れつばいわ。

主人。まあ、白い沓なんぞを穿いておめかしをしてゐるぢやあないか。

少女。あら、白い沓の話なんぞは厭よ。今お母あさんが歸つて來たらあの事を仰やいよ。

主人。その事かい。

少女。だつてお約束ですわ。

主人。うむ。

少女。約束といふものは守らなくてはならないものですわ。

主人。さうさ。

少女。わたし約束の履行を要求してよ。わたしはお父うさんの良心なの。

小さい意地の悪い良心なの。それがお父うさんを責めるの。

主人。うむ。話すよ。(問。)一ごにみな話す事が出来るかどうだか。(問。)お母あさんの體に餘りひどく障りさうなら、みな話す事は出来ないかも知れないからね。

少女。でもお約束なすつたのね。

主人。よしよし。話すから安心しろ。

少女。そんならお母あさんと呼んで來てよ。わたしはお邪魔になるといけないからエデトとクロケットをして遊んでゐてよ。

主人。性急だなあ。少し待てよ。

少女。いゝえ。わたし待たないわ。

(少女急ぎて園へ退場。直ぐに妻園より登場。)

妻。植木がみんな犬さくになりましたね。そして池の葦が大層茂りましたのね。(問。)何かわたしにお話がございますつて。

主人。誰がさう云つたのだい。ミルラか。

妻。ええ。

主人。うむ。その事か。(問。)別にこれといふ程の事でもない。(問。)實はエドトの事を話して聞かせようと思つたのさ。

妻。どんな事なの。

主人。格別な事ぢやあないのだ。あの子があゝして内にゐるのをお前が變に思やあしないかと思つて。

妻。あら。あの子の來てゐる事は疾うから知つゐたとさつきも云つたぢやございませんか。

主人。さうさ。病院で外の患者から聞いたと云つたつげな。その患者と

いふのは誰だい。

妻。参事官ヒョブケンといふ方の奥さんでした。あの方を御存じ。

主人。ちよつと知つてゐるごんな風に話したのだい。

妻。オオエルベツクの事を話しましたの。

主人。どうしたつて。

妻。難船の事だの、その外色々話しましたわ。詰まらない事ばかりですわ。もうそんな話は止ませうね。

主人。でも己はごんな事を話したか、それが聞きたいのだが。

妻。その奥さんはあのフォリイレンゾナントとかいふ病氣なので、すから、のべつに饒舌るのですもの。(問。)随分馬鹿らしい世間話をしましたの。

主人。ごんな事を云つたのだい。

妻。あなたに話すのは厭ですわ。

主人。己は聞きたいのだ。どうぞ聞かしてくれい。さあ。

妻。(吃りつゝ)あなたそんなにお聞なさりたくつて。随分馬鹿らしい話

ですわ。オオエルベックさんと奥さんは難船の時亡くなつてしまひまして、子供が残つたといふ事だが、お内にゐる小さい子はその子ではないのだから。 (間。)

主人。お前はその話を本當だと思つたかい。 (間。)

妻。もう今では本當だとは思ひませんわ。

主人。それではその時は本當だと思つたのだな。

妻。ええ。わたしみな白状してよ。實はね、その欺されたのがわたしの爲めになりましたの。最初に聞いた時は非常に腹が立つたもんですから、病氣が急にひどくなりましたの。それが轉機さかになつて、病氣がふつと直りましたの。言つて見れば病氣で無神経になつてゐたのが、嫉妬のお蔭で覺醒しましたのね。そして早くあなたの傍へ歸りたい、早く健康になりたいと思つて、どうどう健康になりましたの。院長さんもさう云ひましたわ。直りたい直りたいと思つて直つたのですと。それから直つて考へて見ると、何も

怒らなくても好いやうに思ひましたの。 (間。)

主人。いやさうでない。序でだから少しこの事を話さなくては。

妻。なせでせう。もう止さうぢやありませんか。

主人。ごうもさうはならないのだ。己は言はなくてはならないし、お前は聞かなくてはならないのだ。

妻。でもわたしの方で止して下さいと申したら止して下さいますのでせう。

主人。 (上着の隠しより一通の手紙を取り出す。見てくれ。これがマルテル・オオエルベックがあゝの男の乗つたアンフイトリテ號の甲板で書いて、船が歐羅巴の港を出る前に、己によこした最後の手紙だ。讀むから聞いてくれ。

(手紙を讀む。)

るアンセルム君。

妻。(朗讀を遮る。)なせあなたそれをわたしに読んで聞かせようとなさるの。

主人。この手紙に書いてあるのだ。もし自分たち夫婦の身の上に非常な事があつたらエヂトが事を宜しく頼むと書いてあるのだ。これを御覽。

妻。わたし讀まなくてもようございませう。(激したる様子。)なせあなたはわたしをそんな度量のない畜(ちく)な人間だと思ひなさるの。(問。)もうそんな話は止して綺麗に仲直りをして下さいまし。(握手の爲めに手を差伸ぶ。)

主人。(たゆたひつゝ握手す。)どう思つてゐるのだい。

妻。わたしの顔をちやんと見て下さいまし。ねえ。あなたはみだらな方ではないでせう。エヂトは本當にルイイゼオオエルベックさんの生んだ子なのでせう。それに間違ひはないでせう。

(主人は默然として唯堅く妻の手を握る。)

これでようございませう。そしてもうこの事は云ひつこなじですよ。決し

て決して云つて下さいませう。本當にわたしは胸がさつぱりしましたの。これであなたとわたしとの仲にはなんの隔てもなくなつたのですから。

主人。(たゆたひつゝ。)一體これまでは隔てがあつたのかい。

妻。でもなんだかあなたがわたしに氣を置いていらつじやるやうに見えましたのですもの。(問。)なんだかお互に他人らしくなつてゐましたのね。

(問。)無理もございませんわ。(問。)ほんにほんに長い年月の間わたしはどんなにかあなたにお目に掛かりたく思つてゐましたらう。(問。)そしてやつこの事でお内へ歸つて参りましたのね。(問。)それなのにあなたは餘所餘所しくなさるのね。(問。)實際ですわ。かぶりをお振りなすつたつて。わたしにさう感ぜられるのですもの。(問。)それはわたしはお婆あさんになりましたの。ですが入院する前はまだ若かつたのに。

主人。なにまだそんなに美しいぢやないか。

妻。なせあなたはそんなに變つておしまひなすつたの。(問。)そのわけをわたしに言つて聞かして下さる事は出来なくつて。

主人。どう變つたといふのだい。

妻。わたしは愛情に飢ゑてゐますの。あなた。なせ昔のやうにわたしの額を撫でよは下さらないの。なせわたしの目にキスをしては下さらないの。なせ昔のやうに優しい名でわたしを呼んで下さらないの。優しくしては下さらないの。

主人。(近寄りつゝ) サビイネ。

妻。あなたはまあ眞蒼になつて入らつしやるのね。どうかなすつて。

主人。どうもしやあじない。己がどうするものか。

妻。いゝえ。どうかしてお出でなさるわ。(問) 何か氣にしてお出でなさるのね。わたしを氣にしてお出でなさるの。

主人。さうかも知れない。

妻。なせでせう。

主人。お前はまた美しいなあ。

妻。それがどうだといふのでせう。(問) 分からないわ。

主人。(聲をかすめて) 院長の手紙にもうお前は妊娠してはならないと云つてあつた。今度妊娠すると一命があぶないと云つてあつた。

妻。(甚しく激したる様子) あなた方は最初から歸つて参つたわたくしを客間へお入れなすつたのね。これでもまだ悪いのでせうか。(問) たゞへ命があぶなくてもわたしが死にたく思ふのならどうでせう。自分の命をどうしようよ、それはわたしの権利ではないでせうか。

主人。それはお前にはさういふ権利があるかも知れない。人の命をあぶなくする権利は己には無いではないか。

妻。まあ御立派な事ね。さも愛情のあるやうに、愛情の無いあなたの心を旨く飾つてお見せなさる事ね。人の命ですご。それだけで澤山ですわ。兎の毛程でもあなたの方に愛情といふものがあるのなら、そんな事が仰やられたものではございません。併し爲方がございませんわ。あなたの爲めにはこのわたしがなんでせう。死んだと思つたのに戻つたもの。柩の中から出て来たもの。墓場から来た幽霊ですからね。



主人。サビイネ。聞いてくれ。苦勞をしたのはお前ばかりではない。己の方がお前より餘計に苦勞をしたかも知ない。己だつて長年の間お前に逢ひたく思つてゐた。己とお前の仲のやうな親しい仲でゐたものが、たとへ別かれてゐたからといつて、さう冷淡になられるものか。それがお前に分らないかい。

(主人妻を抱き接吻す。上の最後の詞をいふ時、世話娘登場。)

世話娘。(自から抑へたる聲にて。)アンセルムさん。

(主人は妻を放し、驚の目を睜りて世話娘を見る。妻は主人と世話娘とを見較ぶ。)

妻。(世話娘に。)なんの御用なの。

世話娘。(自から抑ふる様子。)あの、わたしは鍵を取りに來ましたの。ここにありましたわ。

(世話娘卓の上より鍵の入物を取り、我が部屋へ退場。)

妻。(長き間を置く。)あなたは。あなたは。

(女中エロニカ廊下の戸口より登場。)

女中。御膳を出しませうか。

妻。あゝ。好いからお出しよ。(幕。)

第三幕

舞臺は前幕通り。○同日の午後。世話娘右手腕付の椅子に腰を懸けゐる。

主人は兩手をすぼんの隠しに入れてあちこち歩きゐる。

主人。なんだつてあんな事をしたのだい。

世話娘。やつぱりわたしの思つた通りですわ。

主人。どうも己には不思議でならない。いつも人に悟られてならないことを悟られるやうな迂濶なお前ではないぢやないか。なんといふ目付をしたら。あんな眞似をすればこんなぼんやりでも氣取つてしまふぢやないか。

世話娘。やつぱりわたしの思つた通りですわ。

主人。可笑しいぢやないか。サビイネはまだ兎に角己の妻なのだ。妻に接吻位したつて、なんでもないぢやないか。

世話娘。わたし思ひ直しましたの。わたし出ては行きませんわ。

主人。誰が出て行けと云つたい。

世話娘。さつきはわたし自分を犠牲にして行かうと思ひましたが、あれは考が違つてゐました。わたしはすっかり考へ直しましたの。わたしこの内にゐますわ。

主人。勿論さうありたいわけだ。

世話娘。そしてサビイネさんに出て行つて貰ひますわ。

主人。どこへ。病院へ返すといふのか。

世話娘。この永の年月の間わたしが胸の中でどう思つてゐたといふことはあなたには分かつてはゐないのでございます。とてもお話をしたつて好くはお分かりにならない位でせう。併し是だけは分かつてお貰ひ申したいのでございます。奥さんにもならないでこの内に這入り込んでゐたわたし

の身分は、どの位世間體が悪かつたといふことはお分かりになつても好ささうなものでございます。あなたのお爲を思ふばかりで、わたしは重い十字架を背中に負つてゐたのでございます。あなたのお爲を思つてわたしは我慢に我慢をしてゐました。それは事によつたら外に為やうがなかつたかも知れませんが。今日になつて見ればその爲やうがあるやうになつてゐます。サビイネさんが直つたのはわたしの爲には不幸ではないのでございます。

主人。誰が不幸だといつたのだい。

世話娘。今朝はわたくしそれを自分の受けたひどい打撃だと思ひましたの。併し今になつて見ればわたしの目が明きました。サビイネさんの直つたのは、一家の幸福でございます。サビイネさんが病氣でゐて、お醫者で直るもんだか直らないもんだか分からなかつたのでございませう。無論あなたが離婚をお申し出なさるわけには行かなかつたのでございます。併し今サビイネさんが直つて歸つて見れば、わたしはあなたにサビイネさんと離婚してお貰ひ申します。

主人。ふん。そんなことがサビイネに對して残酷極まることだといふことはそれはそれにして置かう。たつた今歸つた所でそんなことをするのは随分ひどい。併しさういふ感じはお前の方ではよく分からないかも知れない。それはそれにして置いて離婚を請求するには理由がある。其理由があるかい。堪へ難き厭悪なんぞといふ曖昧な理由はお前も知つてゐる通り、もう現行の民法にはないのだからな。

世話娘。いゝえ。離婚の理由はございますわ。エヂトといふ子供があります。あなたは自分の犯した罪を自白なされれば宜しいのでございます。

主人。ふん。己が悪くて離婚するといふことになるミルラをサビイネの方に取られてしまふ。所が己はミルラが手放したくない。

世話娘。(不平なる様子。)えゝ、えゝ。さうでございませうとも。ミルラ、ミルラと云つていつでもミルラがお大事なのね。そしてエヂトなんぞは私生兒になつてゐても平氣で入らつしやるのね。いつかはあなた時が來たらエヂトを養子にすると仰やつた事もありますが。

主人。その時がまだ中々來ないのだ。養子の事も離婚の事も今そんな事を言つてゐる時ではない。直つたばかりのサビイネにそんなことが聞かせられるものか。お前だつて院長がなんと云つてよこしたか知つてゐるだらうぢやないか。

世話娘。えゝ。それはこなひだの手紙なら知つてゐますとも。でもその前に来た手紙のことはわたくしは知りませんのね。

主人。その前の手紙とはなんだい。

世話娘。そんな事を仰やつて。あなたはいつか手紙の來たのをわたしに隠して入らつしやいましたのね。

主人。でも病院から來た手紙を見せるとお前はいつも厭な顔をしたぢやないか。何物かを犠牲にして讀んで見てくれるといふやうな様子だつたぢやないか。

世話娘。あら。院長の手紙はわたしいつでも待つてゐるやうにして讀みましたわ。院長さんが豫報を致しましたでせう。

主人。なんの豫報を。

世話娘。サビイネさんが今に歸るのだと。

主人。それは今朝の手紙で。

世話娘。(甚しく激したる様子。)あなたなせ嘘を仰やるの。

主人。嘘なんぞは言はない。

世話娘。わたしが知らないと思つて。

主人。まあさういはずに聞いてくれ。

世話娘。(殆ど叫ぶが如く。)あなた知つてゐてわたしに言はなかつたのですわ。

主人。まあそんな大きい聲をしなだつて分かるぢやないか。何もこんな事を言ひ合つてゐるのをサビイネに聞かせなくても好い。

世話娘。たんと聞いて貰ひませう。わたしサビイネさんが恐くはなかつてよ。院長の手紙ばかりではないでせう。リッヒャルドさんも、もう十四日も前にさういつて來たぢやあございませんか。

主人。うむ。その事か。リッヒャルドが云つたのか。

世話娘。あなたとわたしとの間に秘密なんかがあるやうなら、それはわたしの方で荷拵へでもして、さつさと出て行つた方が好いのかも知れませんかね。

主人。もう好い加減にして己に物を言はせたつて好いぢやないか。

世話娘。どうぞ。あなたの仰やることを聞かないとは申しませんわ。

主人。實はな。お前には濟まないのだが。

世話娘。(嘲るやうに。)さう。濟まないといふ事があなたにも分かつてゐて。濟まないごさへ云へばそれで濟むお積りなの。

主人。もう止せよ。そんな風ではまるで話は出來ないぢやないか。

世話娘。ようございます。さう仰やい。

主人。己はとつくにお前に打ち明けて言はうと思つてゐたのだ。

世話娘。言はうと思つて入らつじやつたのね。(笑ふ。)

主人。そんな厭な笑ひやうをするものぢやない。

世話娘。笑ふごちやございませぬの。ほんにほんに人の氣も知らないで。(間)そして言はうと思つたのになせ言はずにおしまひなすつたの。

主人。丁度その時があつたのグスタフがシンヂケットを脱してしまつてお前が財産の残りをみんな出してくれた時なのだ。もうそれまでにも出せるだけのものを出してくれて又その上に有りたけ出してくれた時なのだ。そのお前にそんな事が言はれるかい。それが己に不可能だつたといふことがお前には分からないかい。己にもなつて見る。不可能な事は不可能ぢやないか。あれだけのものを犠牲にしてゐるお前に言へるかい。言はう言はうとは思つたに違ひない。それが言へなかつたのだ。どうも喉を締められてゐるやうで詞が口から出なかつたのだ。

世話娘。(ゆるやかに)おや。それで言はなかつたと仰やるのね。

主人。もうお前の金は己の手に貰つてゐたのだから、それを言つたらお前の金が貰はれまいなんぞといふそんな卑劣な考へではない。その金を出してくれた恩義のあるお前にそんな事が聞かせたくなかつたのだ。ええ。そ

れがお前に分からないかい。

世話娘。それはどちらでも好いわ。兎に角お金の爲めなのね。

主人。それでお前は怒るのかい。

(世話娘黙る)

それに院長の手紙だつてさうはつきり書いてあつたのぢやない。己にだつてはつきりは分かつてゐなかつたのだ。もうどうぞ怒らずにゐてくれい。勘忍してくれい。

世話娘。わたし怒つてはゐなくつてよ。(間)併しかうだけは思ひますの。わたし身一つならこのお内を出て行きますわ。あのエヂトといふものがあつて見ればどうもさうは参りません。それを承つた上は猶更どうしてもサビネさんと離婚をしてお貰ひ申したいのでございませぬ。

主人。そんなことが今出来ないとはいふことはお前にだつて分からうぢやないか。そんな事をいふのは無駄だらうぢやないか。

世話娘。いゝえ。わたしにはちつとも分からなくてよ。なせ離婚が出来

ないと仰やるの。

主人。サビイネはまだ直つたばかりで半病人なのだ。お前はそのサビイネに荒いことを言つて結果がどうならうと構はないと思ふのかい。それで良心が済むのか。己なんぞは。

世話娘。(詞を遮る。)待つて下さいまし。わたしだつて好く考へて見なくつては分かりませんが、どうもさうしたつて好くはないかとも思はれますの。

主人。それはお前が機嫌を悪くしてゐるからさう思ふのだ。

世話娘。さうぢやなくつてよ。人間は幾ら人の爲めを思つて己れを虚しくすると云つたつて、際限がありますわ。わたくしの爲めにはサビイネさんよりエデトの方が大事です。わたしは子供の母だから子供の爲めに奮闘しますわ。

主人。そんな残酷な事をいふのをお前の真心だと思へといつても、己にはさうは思はれない。お前の氣立の優しい事は己が好く知つてゐる。そんな悪黨らしいことを云ふなよ。それにお前は己の言つた事が好く分らない

のだ。養子問題が持ち出されないと云つたのは、今持ち出されないと云つたのだ。永久に養子にしないと云はれない。兎に角目の前に色々な事が横はつてゐるのに、速い先の事まで考へるには及ばないのだ。時期が来ればどうでもなる。

世話娘。そんなことを言つてわたくしを釣つてお置きなされるのね。朝三暮四だわ。

主人。ええ。そんなことを言ひ合つてゐては頭が悪くなつてしまふ。もう一時間すれば委員が来る。己は頭を好くしてゐなくちやならないのだ。こんな話はいつだつて出来るのだがなあ。

世話娘。そんな話を誰が始めましたの。わたしでせうか。

主人。まあ。好いといふことよ。もう和睦しようぢやないか。詰まらないことよ。

(主人世話娘に近づきて接吻せんとす。世話娘顔を反けて避く。)  
世話娘。お止しなさいまし。お障りなすつては厭でございます。

主人。(肩を動かす。)さうか。厭なら爲方がない。

(女中エロニカ電報を持ちて登場。)

世話娘。電報なの。

(主人電報を受取りて開く。)

女中。ベヒテルさんが只今参りました。

主人。(電報を読み終りて。)や。四時ので来るのだな。

世話娘。何が参るのですか。

主人。飛んだ間違ひをしたものだ。ベツチエンベルゲル教授が四時の汽車で来るといふのだ。己のやつた手紙が間に合はなかつたと見える。(女中に。)ベヒテルは臺所にゐるのかい。こゝへお出でといつてくれ。

(女中退場。引き違へ技師ベヒテル左手廊下の戸口より登場。)

主人。ベヒテル君。君は手紙を届けてくれたかい。諸君はみな内にゐたのかい。

技師。大抵内にをられたのです。あの大學教授だけが四季の茶屋に行つ

てをられるといふことでした。ベツチエン。

主人。ベツチエンベルゲルだらう。

技師。それです。その方が不在だつたのです。爲方がないから手紙を玄関の人に渡して来ました。

主人。さうか。爲方がない。(間。)君はもう好いよ。

技師。向上器を庭へ出しましょうか。

主人。まあ置き給へ。もうあれには障らないが好い。後で僕が君に手傳つて貰つて自分でやる。歸つてからやる。これから直ぐにステエションへ行かなくちやあ。

(技師廊下の戸口より退場。)

世話娘。迎ひに入らつじやるの。

主人。電報を打つたのは迎ひに来てくれといふ意味なのだ。第一道を知らないのだからな。

世話娘。だつて辻馬車に乗つてくれれば好いわ。

主人。でも少しは御機嫌を取つて置かなくてはならないのだ。委員の中で一番重要な人物だからな。飛行器の事ではあれ以上のオオソリチイはないからな。

(主人入口の戸より退場。直ぐ跡へ妻と少女と園より登場。)

妻。ほんとにうつたうしい天気だこと。気分が悪くなつて來ますの。庭の木の葉が一枚も動きませんわ。

世話娘。さつきはなんだか夕立でも來さうな空模様でしたのね。

妻。夕立でもあれば好いと思ひますの。なんだかかう息が詰まるやうで。

少女。いゝえ。雲がもうこの上の所を通り過ぎてしまひましたの。みんな町の方へ行つてしまひましたの。この頃は町は夕立がしてもこの邊はしませんわ。

(少女ピアノの傍へ寄り二三音を弾す。さていもうこの歌の伴奏を

少し弾じ試みる。)

妻。(世話娘に。)あなた七つの劍の女といふ話を知つてゐて。ゼッアシン。

オフ・ゼ・セザン・ヌヲオツといふの。

(少女電光の如く身を翻して母の方に向き驚きの表情を以て母の顔を見る。)

世話娘。いゝえ。どんな話なの。

妻。童貞女マリアの事なの。七つの劍キリの女とも云ひますわ。

世話娘。それがどうしましたの。

妻。いゝえ。なせわたしがそれを思ひ出したか、わたしにも分かりませんの。病院ではどの部屋の卓の上にも、宗教の書物ばかり載つてゐましたの。  
(聞。)ここいらではもう餘程前からこんなにうつたうしい天氣がしてゐますの。

世話娘。えゝえゝ。もう大分長い間でございますの。夜は雨が降つても、晝はむしむししてゐるばかりでございませう。

妻。あのわたしの飛行機ね。エンミイさんはあれが人間に幸福を齎らすものだと信じてお出でなさるの。



世話娘。あなたの飛行機です。

妻。ええ。いつでしたか宅でさう申しましたつけ。将来は飛行機工場が出来て廉價に拵へて賣るやうになるだらう。丁度今てんでに自轉車を持つてゐるやうに、誰でも飛行機を持つてゐることになるだらうとさう申しましたの。

世話娘。それはさうなるかも知れせんわ。

妻。それはさうとしまして、その飛行機が人生の幸福になるでせうか。

世話娘。それはきつとなりますわ。アンセルムさんがさう仰やいましたつけ。人類が自然に打ち勝つ最後の勝利、精神が物質に打ち勝つ最後の勝利が飛行機ですつて。

妻。(聞くに忍びざる如く、爆發的に) 違ひますは。人生の最大不幸です。(間) たしかにさうです。

世話娘。なせですの。

妻。自然に打ち勝つなんと云つたつて、何も自然といふものが、人間がそれ

を相手にして戦はなくしてはならないものではないぢやありませんか。

世話娘。それはさう言へばそんなものかも知ません。

妻。いゝえ。わたしはあなた方とまるで違つた考を持つてゐますの。

世話娘。どう違つてお出でなさるの。

妻。飛行機といふものは、言つて見れば、(間) アポカリプシスの獣ですの。

啓示の獣ですの。

世話娘。(呆れて妻を凝視す) あの、なんと仰やつたの。

妻。アポカリプシスの獣だと申しましたの。それが出現する時が世界の末でございますの。混沌の時代でございますの。

世話娘。まあ、妙な事を仰やるのね。

妻。(次第に激昂する様子) まあ飛行機といふものが、誰でも持つてゐるものになつてしまつた世の中を好く想像して御覽なさい。蒸熱い夏の夜に、窓をしめて寝てゐると、息が屏まりさうになつて来るでせう。そこで窓を開けてゐる。そこへ飛行機がひらひらと飛んで來ますのね。聲も無く、音も無く

鳥が飛んで来るやうに。どんなに身を慎んでゐる處女でも誘ひ出されてしまひます。力づくで連れて行かれてしまひます。昔話の木彫の鳥に乗せられて行く王女のやうに。自動車で乗り廻つてゐるうちには、國境で調べて見ることも出来る。飛行機で行く日になつては、もう國境といふものがないでせう。どんな暴動でも勝手に起されます。町へも家へも空の上からダイナマイトを投げ付ける。そしてほんとの高飛びをしてサハラ沙漠の真中まで唯一飛びに逃げて行く。國家にも政府にもなんの威力もないのです。禁制といふものはない。何を爲るのも自在です。自然に對して人間の犯す罪科の極點は、まあそんなやうなものでせう。人間は翼無しに作られてゐるのです。(間)おや。何を笑ひなさるの。

世話娘。わたくし笑ひはしませんの。

妻。だからわたしの飛行機は人生の爲めに危険だと申しますの。おや。又笑つたぢやありませんか。

世話娘。いえ。笑ふもんですか。

妻。隠したつて見えてよ。わたしの飛行機、わたしの飛行機とさう云つたのを笑ふのでせう。

世話娘。まあ。そんな事を。

妻。エデトに聞きましたつて。昔わたしにくれて置いたあの飛行機をわたしののびなくなつた跡で、宅があなたに上げましたつてね。

少女。お母あさん。エデトの言つたのは嘘よ。

世話娘。あの飛行機をわたしが貰ひましたつて。そんな筈はないではございせんか。

妻。いえ。あなたの方ではあの飛行機を宅がわたしにくれた筈がないやうに思つてゐるのでせう。

世話娘。なせわたしがさう思ふだらうと仰やるの。アンセルムさんは飛行機をあなたに上げたかも知れませんわ。

妻。くれたかも知れないと仰やるのね。わたしがさういふからは、そんな事がないにも限らないと仰やるのね。まあエンミイさんのお人の好いこと。

(間) 笑談は笑談で、あの飛行機は宅からわたしが貰つてゐますから、どうぞさう思つてお貰ひ申しませう。

世話娘。まあ。なんだつてあなたはそんなに逆上して入らつしやるの。わたくしはさうでないとは申しませんわ。

妻。わたしはわたしの所有権を保護します。わたしの所有権はまだ消失してゐませんの。

世話娘。誰があなたの所有物を奪つたと仰やいますの。

妻。誰がですと。好くそんなことが云はれますのね。一體あなたは先からアナキストだは。知つてゐますは。

世話娘。まあ。まるでそれでは常識を失つて入らつしやるのですわ。あなたの飛行機ならあなたの飛行機で好いではございませんか。誰がさうでないと云ひました。それで宜しいのでございませう。まだその外に仰やることがあつて。

妻。ええ。わたくしはわたしの物がたしかにわたしの物だといふ事を確

めたいと思ひますの。

世話娘。どうして確めようと仰やるの。

妻。わたしはあの飛行機をわたしの部屋へ持つて行つて置かうと思ひますの。委員の方がお出でになるならわたしの部屋へお出でになるが好い。たとへあすこは客間でも。

世話娘。なんだつてそんな詰まらない事をなさるの。あなたのお部屋へ飛行機を持つて入らつしやつたつて、なんにもなりやしなないぢやありませんか。

妻。大きにお世話ですわ。アボカリブシスの文句にあります。「汝の見し獣はありき。されど今はあらず。」それをわたしはあなたに舉げて示します。あなたなんぞの讀んでゐる現代思想の書物より聖書の方が尊いのです。(間) 笑ふならたんとお笑ひなさい。女が猩々緋の衣を着れば、神の怒りの黄金の七つの皿が翻されます。(間) わたしの考へ一つでは、あの飛行機を徹底に壊すことも出来ます。

世話娘。まあ。をかした事を仰やいますのね。

妻。でもわたしの所有物ならどうしたつて好い筈ですわ。

世話娘。それはあなた真面目で仰やるの。

妻。真面目でいふかと問ふのですか。

世話娘。かう申したらお氣に障るか知れませんが、どうもそんなことを真面目に仰やるとは。

妻。エンミイさん。笑ふなら最後に笑へといふ諺がございますよ。あなたはそんなことは出来ないことだと思ひでせう。併しね、愛の爲めと憎みの爲めには出来ない事と云ふものはないとわたしは思ひますの。愛情の力では恐れずになんでも出来る。丁度それと同じやうに憎みの力もなんでもします。自分と自分の目的との中間に挟まつてゐて邪魔になるものがあれば打ち壊して進んで行きます。(間)わたしの憎みはあの飛行機。

世話娘。そのお憎みもプラトニカルである間は、わたしは彼是申しますまい。併し一體なせお憎みなさるの。生命のないあの器械を。それでは丸で。

妻。あなたの愛するものだから、それでわたしは憎みますの。それで、それでわたしは憎みますの。あなたが愛して、手傳つて拵へたあの飛行機。あなたがアンセルムに手傳つて拵へたあの飛行機。生命がない所ではない。あの中に生きた血が脈を打つて廻つてゐます。體を痛めて産んだ子を母が可哀いと思ふやうに、あなたの爲にはあの飛行機が可哀くなくてはならない筈です。

世話娘。さう仰やればそんなもの。如何にも體を痛めて産んだあの飛行機に違ひない。我が子を庇ふと同じやうに、わたくしの息のある間は、あの飛行機をも保護して見せます。指もささげはいたしません。

妻。どうどう心をお明かしなすつたのね。まあ見て入らつしやい。

世話娘。どうしようとお思ひなさるの。わたくしがどうもさせませんわ。妻。いつそ飛行機なんぞのない方が。

世話娘。え。

妻。まあ見て入らつしやいよ。(右前の部屋に入らんとす。)

世話娘。(立ち塞がる。)お待ちなさい。

(世話娘素早く妻の側を摩り抜けて右前の部屋の口に馳せ寄り、主人の部屋の戸を鎖し、見せ附くるやうにその鍵を自分の隠しに入る。)

妻。(甚しく激したる様子。)まあ失禮な。

世話娘。(落付きて。)これで器械は安全です。

妻。鍵はどうなすつたの。

世話娘。わたしの隠しにあります。

妻。(叫ぶ。)ぬすつと。

世話娘。(見返る。)あなたは何を仰やるか、御自分でもお分かりにならないのです。

妻。いえ、いえ。わたしは分かつてゐる。分からない事などは決して言はない。それをあなたが疑ふなら、あなたの方が嘘衝きです。成程一度は精神病になつた事もあります、今は直つて歸つたのです。

世話娘。さうでないとは申しません。

妻。いえ、いえ。さういつたのです。失禮な。もうわたしは勘忍出来ない。

世話娘。さうですか。さう仰やるなら爲方がない。わたくしは、わたくしこの申した事を取消します。

妻。それよりわたしをあ部屋へ。

世話娘。いえ。それは決して出来ません。

妻。一體宅はどこへ行きました。

世話娘。ステエションへお出でました。

妻。え、口惜しい。ぬすつとめ。この戸を直ぐにお開けといふに。主人の女房が言ひ付けるのです。

世話娘。(左手へ行かんとして。)わたくしは御免を蒙ります。

妻。戸をお開けといふに。

世話娘。わたくしはあちらへ行くのです。どうぞ道を開けて下さい。

妻。鍵をこつちへ渡してお置き。主人の女房が言ひ付ける。わたしの権利で命令する。

世話娘。それはみんな違つてゐますの。あなたに権利はございませぬ。御命令は受けません。

(立ち塞がる妻を世話娘押し退けて左手廊下の戸口より退場。妻は暫く茫然として立ちをり、さて啜泣きして腕のある椅子に身を倒す。少女駆け寄り傍に膝を突き、両手にて抱き付き、共に泣く。)

少女。お母あさん。どうぞそんなに泣くことだけはよして下さい。お母あさんがそんなに泣いてはわたしどうして好いか分からないわ。わたしの出来る事ならなんでもしますから。もう泣かないで下さいよ。

妻。わたしに権利がないと云つたのをお聞だらうね。あんなひどい事を云つて。わたしに権利がないのなんの。 (問) お前に分かるかい。 (問) お前わたしに手傳つてくれなくてはならないよ。さうでないよわたしは又いつかの様になるかも知れない。それ。いつかの様にといへばお前にも分かるだらうね。 (問) なんだか又あんな風になりさうな心持がするのだよ。

少女。まあさうなつては大變ですわ。どうにでもしてさうならないやう

にしなくてはなりませんわ。

妻。さう思ふならお前がわたしに手傳つてくれなくてはならないよ。

少女。わたしに出来る事ならなんでもしますわ。 (問) でもわたしがどうしたらお母あさんの手助けになるのでせう。

妻。あの鍵をわたしに取つて来ておくれ。

少女。鍵はをばさんが隠しに入れて持つてゐますからわたしがおくれと云つたつてとでもくれませぬわ。

妻。どうしてもわたしはあの飛行機を手に入れなくてはならないのだからね。どうぞ手傳つておくれ。わたしがいつかのやうにならないやうにするには、それより外に爲方がないのだよ。あの飛行機が手に入らなければわたしはどうもいつかのやうになりさうなのだよ。

少女。(殆ど叫ぶやうに。) いよえいよえ。お母あさん。そんな事があつてはなりません。

妻。どうもわたしは又病氣が起りさうなのだよ。どうにかしてあの飛行

機を手に入れる事は出来まいか。どうぞ考へて見ておくれ。

少女。(忽ち思ひ付きたる事ある様子。)お母あさん。

妻。どうにか爲様があるとお思ひかえ。

少女。ひよつとかしたたらあの部屋の窓が明いてゐるかも知れませんか。

妻。明いてゐたらどうしようといふのだえ。

少女。明いてゐればわたしが窓に上つて這入りますわ。

妻。お前の背が届くだらうか。

少女。ええ。届くかも知れませんか。

妻。早く御覽よ。

(少女は足を爪立てゝ圍へ退場。直ちに引き返して登場。)

少女。(歸り來て、小聲に。)お母あさん。

妻。どうだい。

少女。窓が明いてゐますの。

妻。登れるかい。

少女。ええ。登れますわ。

妻。そんなら登つておくれ。早くおし。人が來るといけないから。この子は何をぐつぐつしてゐるのだらうね。

少女。どうもわたし變ですわ。

妻。何が。

少女。どうしたのだか。(間。)わたし願へて爲やうがありませんわ。膝が願へて。

妻。心配しなくても好いよ。わたしがしたとさういふから。

少女。いゝえ。そんな事をこはがつてゐるのではありませんわ。

妻。そんなら何がこはいのだい。

少女。お母あさん。どうもそんな事をするのは大變な悪い事だらうかと思ひますの。

妻。それは外の人に對しては悪い事かも知れないけれど、外の人がわたしに對してどの位悪い事をしたか考へて御覽。お前はそれを忘れてゐてはな

らないのだよ。

少女。ええ、ええ。ほんとにさうでございますのね。わたしはお母さんの云ふ通りにしなくてはなりません。ええ。どうしてもしなくてはなりません。

(少女先の如く園へ退場。稍長き間。少女重げに飛行機を持ちて、忍び足にて再び登場。)

妻。(喜ばしげに。)おや。持つて来ておくれたね。

少女。ほんとに大變でしたわ。

妻。何が。

少女。わたし齒ががちいひましたわ。

妻。こつちへおよこし。

(少女妻に飛行機を渡す。サビイネそれを受取り畢る時精神激昂せる餘りに、覺えず飛行機を床の上に取り落す。)

少女。(甚しく驚きたる様子。)まあ。曲つてしまつてよ。柁が折れてよ。

妻。ほんにね。わたしもこんなにしようと思つたのではなかつたがつひ手が滑つたのだから爲方がない。でもかうなれば爲方がない。却てかうなつた方が好いのだよ。

少女。大層お金の掛かつた飛行機ですわ。お父さんがどんなにか惜しくお思ひなさるでせう。

妻。構はないよ。かうなればもう飛行機はわたしのでもない替りにエンミイのでもないのだから。

少女。飛行機がこんなになつたのに委員とやらがもうお出でなさるでせう。(間。)わたしが爲たさう云ひますわ。(間。)わたし體がこんなに顔へますわ。(間。)お母さん。わたしきつと神の咎めを受けますわ。

妻。なんの。それはわたしがしたのだ。お前ではない。

少女。いゝえ、いゝえ。神は何もかも見てお出なさいます。神はわたしのこの胸の中まで見透してお出でなさいます。わたしがどの位あのをばさんを憎んでゐるかといふことは神は知つてお出なさいます。



妻。あのエンミイをかい。  
 少女。ええ。お母あさん。わたし本當に根性が悪いの。(間)わたしが窓から這入てこれを盗んで持て来る氣になつたのはエンミイをばさんが憎いからだらうと思ひますわ。

妻。それは跡からさうお思ひのだよ。

少女。いえ。さうではありませんわ。わたしはあの飛行機をばさんのやうに思つてゐましたの。ですからわたし壊れたのが嬉しくてよ。(間)この心持はお母あさんあなたにだつて分かるでせう。こんなことを喜ぶのは悪い事とは知つてゐてもわたし嬉しくつてなりませんわ。お母あさん。わたしこんな根性が悪いのですもの。

(世話娘廊下の戸口より登場。床の上に委せられたる飛行機を見る。)

世話娘。まあ。恐ろしい事をなすつたのね。

妻。(凱歌を奏する如く)ええ。さうでせう。身の毛がよだつでせう。わたしの権利を人が取ればわたしも自分でどうにかして権利を得ようとい

しますの。わたしの物を人が盗めばわたしも自分でどうにかしてその所有権を恢復しようといたしますの。

世話娘。(身もよもあらぬ様子)まあ。こんな人を病院でどうして退院させたのだらう。

少女。(怒に聲頭へ荒々しく)わたしのお母あさんにそんな失敬なことをいへばわたし勘忍しないわ。

世話娘。(少女の方へ歩み寄る)お前が手傳つたのだね。さうだらうね。

少女。(あらがふ様子)手傳つたのですつて。違ひますわ。わたしが一人でしたの。

世話娘。(鋭く)お前が。

少女。ええ。わたしがしました。そしてわたしそれをしたのが嬉しくつてよ。

(世話娘平手にて強く少女の片頬を打つ。妻走り寄りて兩手にて少女をかばふ。)

妻。(少女に)あれがお前を打つたのだね。

少女。(泣かずに顔を蒼くしてゐる)ええ。わたしなんともないわ。

妻。(身もよもあられぬ様子にて世話娘に)ようもようもお前さんはわたしの娘を打擲しましたね。

世話娘。(妻に構はず飛行機を眺めゐる)どう思つて見ても事實とは思はれないやうな事をしでかす人達だ。

妻。わたしの云ふ事が聞えないの。わたしの娘を打擲すればわたしも只は置かないから、どうぞさう思つておくれ。

世話娘。どうにでも勝手になさいまし。

妻。(物くるはしく)勝手にしますとも。お前さんを追ひ出して貰ひます。今日のうちに追ひ出して貰つて見せます。

(門口にて戸の錠を開くる音す。扉を開き又閉づる音す。)

世話娘。おや。お歸りだ。大切な飛行機がお留守にこんなになつたのに。

(門口より主人と教授ベツチェンベルグとの二人登場。教授は長き白

き頬髯ある人にて金の目金を掛けゐる。)

教授。(戸口にて主人に)どうぞ貴夫人方にお引合せ下さい。

主人。(紹介す)ベツチェンベルグ教授をお連れ申した。これが妻で。

これが従妹のゲルスドルフで。これが娘でございます。

教授。(妻に)奥さん。實に結構なお住ひですね。わたくしなんぞのやうに市ちゆうの借屋に住つてゐるものは、かういふ別荘に参りますと、別世界に來たやうな心持がしますよ。騒々しい物音も聞えないし、土瀝青の悪臭い匂もしないし、實に結構です。こんな阿巽アキツに富んだ空気を呼吸してゐればきつと命が延びます。(間)お庭の立派なのは往來から拜見しました。(間)それにこのお住ひの床板は實にお立派ですね。

(短き、ばつの悪き間。)

主人。(世話娘に)何事かあつたのですか。

妻。(世話娘を指さして主人に)どうぞこの人が内から出て行くやうにして下さいまし。わたしはこの人を内に置く事は出来ません。直ぐに追ひ出

して下さいませ。

主人。(小聲にて教授に。)實に濟みませんが妻は少し病氣がございまして、神経性の病氣がございまして。

教授。成程。

妻。あれは嘘でございます。わたくしは健康です。

主人。(世話娘に。)どうしたのですか。

世話娘。あれを御覽なさいませ。

(世話娘床の上に委せられたる飛行機を指さして主人に示す。主人は世話娘と少女とに隔てられて、今まで見ざりし飛行機を見る。)

主人。(兩手にて左右の顛顛を押さふ。)や。

世話娘。ねえ。意外な事でございませう。ベツチエンベルグ様が折角ミュンヘンからお出でなさいましたのに。

教授。成程。お嬢さんの仰やる通りですね。この修繕は大分手間が掛かりませう。

世話娘。ええ。それに花があつた通りに。

教授。(首を振る。)成程成程。これは全體をしかへなくてはなりません。

主人。(飛行機の傍に跪く。)實にひどい事をしたものだ。どうしてかうなつたのだらう。

世話娘。ええええ。わたくし共が拜見しても涙が飜れさうになります。

こんな事をするのが本當のワンダリスムといふのでございませう。

主人。誰がしたのです。

世話娘。奥さんとミルラさんです。

妻。エンミイさんはミルラの頭を打ちました。わたしは勘忍出来ません。どうぞあの方を追ひ出して下さいませ。

主人。これ。ベツチエンベルグ先生がお出でだぞ。

少女。(心配げに母に抱き付きゐる。)お母あさん。どうぞいろんな事を云はないでゐて下さい。どうぞ黙つてゐて下さい。ね。ね。

妻。いえ。わたしは自分の娘を打擲せられては黙つてはゐられないよ。

主人。これ。お前は己をひどいはめに落さうと思ふのかい。  
 妻。いえ。それは違ひます。ひどいはめにはあなたのお蔭でわたしが  
 陥つてをります。

教授。(主人に。) どうもこの状況では、わたくしはお暇をいたした方が宜し  
 いやうですが。

主人。併しどうもそれでは。

教授。(飛行機に指さしす。) 所詮この器械は今日のお役には立ちますまい  
 から。

主人。(神経質らしく興奮したる様子。) 實になんと申して宜しいか分か  
 りませんが、相成るべくはわたくしに兩三日の餘裕をお與へ下さいまして。

教授。それはどうも困難ですな。わたくし遊んで暮す財産家ではないの  
 です。日々の講義があります。實は今日もやうやうの事で二日間の休講を  
 いたして出掛けて参つたのです。二日間が大臣の認可を得ずに貰はれる休  
 暇の最大限です。それ以上の事はわたくしの自由にはなりません。どうも

この器械の様子では修繕に何週間掛かるやら分かりません。そんな長い滞  
 在は所詮出来ません。いや。わたくしはこれでお暇をいたしませう。左様  
 なら。御機嫌よう。

(教授ごちなき會釋を爲し、入口の戸より退場。主人廊下の戸を開く。)

主人。(外に向きて呼ぶ。) ベヒテル君。ちよつと来てくれ給へ。

技師。(登場しつゝ。) 何か御用ですか。

主人。まあこれを見てくれ給へ。

技師。おや。大變な事になりましたね。

主人。どうだらう。二三日で修繕が出来ようか。

技師。(首を振る。) 少なくとも一週間は掛かりますね。

主人。兎に角明日の朝早く来てくれ給へ。そこでもう今日は君歸つても  
 好いからね、これを工場へ持つて行つてくれ給へ。見てゐられないから。

(技師大事に飛行機を取り上げ持ちて退場。)

技師。(退場しつゝ。) まあ、なんといふ事だらう。

(技師廊下の戸口より退場。主人は椅子に腰掛け茫然と空を睨みぬる。)  
 世話娘。(激したる様子にて進み近づく。)あなたさうして入らつしやる所ではございますまい。どうにかしてあのベツチエンベルゲル教授を留めてお置きなされる事は出来ませなかつたのでせうか。

主人。いや。なんといつても待つてはくれなかつたのだらうよ。

世話娘。でも、無駄にして追つ駆けて行つて引き留めて御覽なさいませんか。教授だつて意外な事ですから、あんな風に云ひ切つて歸つたのかも知れません。あなたが詞を盡して説いて御覽なすつたら、待つてゐてくれまいものでもございませぬ。

主人。いや。待つてはくれまいよ。

世話娘。でも無駄にして行つて御覽なさいませんか。その序に外の方々がこゝまで無駄足をなさらないやうに、ステエションまで行つて待ち受けて、次の日曜日まで延期したさう仰やる方が好くはございますまいか。どの方にもごの方にも内の様子を見られるよりは。

主人。(身を起しつゝ)それはさうだな。みんなをこの癡狂病院に連れて来るには及ばない。(間。)おう。お前一じよに来てくれい。己は興奮してゐてろくに物が言はれさうにない。お前は物を言ふ事が上手だから、一じよに来て話してくれい。

世話娘。(帽と傘とを取る。)ええ。わたし参りますわ。そんなら早くしませうね。

(主人と世話娘と門口より退場。妻は椅子に腰掛け目に涙を一ぱい溜めて空を見てゐる。少女は茫然自失せる如き様子にて暫く母の傍に立ちをり、忽然母の膝の前なる床の上に跪き、高き泣聲を立てて、顔を母の膝の上に俯す。)

少女。(啜泣しつゝ)お母あさん。わたしもう我慢が出来なくつてよ。死んだ方が好いわ。(間。)わたしも氣が違ふかも知れませぬわ。(間。)わたしあの女を殺してやらうかと思ひますの。(間。)本當よ。わたし殺さうか知ら。妻。あの女はお前を度々打つたかい。

少女。(首を振る。)いよえ。今までは一度もそんな事はなかつたの。今日が始めてなの。それは早くからわたしを打つやうなら却て好かつたかも知れませんが。そんな風ならわたしの憎い憎いと思ふつらさがこれ程ではなかつたのだらうと思ひますわ。なるたけたんと打つてくれたらわたしは打たれながらあの女の顔を見て笑つてやつたのでせう。さうしたらあの女がさぞ口惜しがつたのでせう。(間)あの女はさうはしないで、わたしに優しく計りしてゐましたの。優しくしてわたしを抱き込まうとしてゐましたの。それにわたしが抱き込まれないもんですから、わたしを忌み憚つてゐましたの。あの女の秘密を何から何までわたしが知つて黙つてゐるのを、あの女は氣取つてゐたに違ひないのです。

妻。何もかも知つてゐるとは、それはなんの事なのだ。

少女。お父うさんがさういつたでせう。

妻。お父うさんが何を云つたといふのだい。

少女。エデトの事を。

妻。母あさんの今まで知つてゐたより外の事は、お父うさんは云ひはなさないよ。

少女。その外なんにも仰やらないの。

妻。なんにも云ひはなさないよ。

少女。まあさうなの。お父うさんは卑怯だわ。わたしにあんなに替つて置いて。

妻。(甚しき不安に陥る様子)お父うさんはわたしに手紙を出して見せたのだよ。それは遺言状のやうな物でね、自分達が若し生きて歸らないやうな事があつたら、あの小さい孤兒を内へ引き取つてくれと書いてあつたのだよ。

少女。それはお父うさんが引き取りました。その赤ん坊は内に二月ゐた頃にデフテリになつて亡くなりましたの。

妻。(躍り上がる)なに。亡くなつたよ。

少女。ええ。亡くなりましたの。丁度その時あのエデトが生れたのでそれを其儘オオエルベツクの孤兒だといつてみんなで育て置きましたの。

妻。みんなでは誰の事だい。

少女。それはホルストをぢさんがお父うさんに手傳つて、世間の人の氣の付かないやうにしましたの。

妻。それはお前たしかかい。御前の痾違ひではあるまいね。

少女。何痾違ひなものですか。

妻。まあ、あのホルストさんもホルストさんだ。なんだつてそんな詐偽を手傳つてさせたのだらう。

少女。ええ、ええ。ほんとにひどい詐偽ですわ。

妻。どうしてお前それが分かつたの。

少女。いつでしたかお父うさんとホルストをぢさんが長い話をしてゐる時、締めたと思つた部屋の戸が締まらずにゐましたの。

妻。それではお前立ち聞きをしたのかい。

少女。お母あさんは嘘わたしを根性の悪い子だと思ひでせうね。

妻。さうではないが聞き違へたのではなからうね。

少女。いゝえ。よく氣を付けてゐてはつきり聞きましたの。  
妻。まあ、なんといふ途方もない事だらう。(問)そしてエヂトの二親は誰なのだい。

少女。あら。それはお母あさん分かりますでせう。

妻。お前は知つてゐるのかい。

少女。知つてゐますわ。

妻。言つて御覽。

少女。でもそんな事を口で言ふと胸が悪くなりますわ。

妻。(少女の手首を握る。)でもわたしはそれが聞きたいのだよ。どうぞなんにも隠さずにわたしに言つて聞かしておくれ。

少女。(再び泣き出して調子劇しく)ええ。お母あさんわたし皆云ひますわ。もうなんにも隠しません。ほんとにわたしは何年も何年も人に云はずにこの事を胸に隠してゐましたの。ですがもう隠されません。今までは誰一人わたしの打ち明けて話す人がありませんでした。それでわたしはその

秘密を重荷のやうに一人で背負つて歩いてゐました。それでわたしの胸が重くて重くてなりませんでした。いつでも自分の知つてゐる事を知らない振をしてゐました。どんなに悲しく思つても、それを隠してをりました。只夜になつて一人になれば、腹さんざ泣きました。そして神には隠さず、何もかも訴へました。人には誰にも申しません。

妻。ほんに我が子がそんな思ひをしてゐるのに、母のわたしは側におて慰めてやる事も出来なかつたか。

少女。でもお母あさん。今慰めて下さるから好いわ。同じ泣くのも二人でかうして泣いてゐれば、なんだか嬉しいやうなのね。

妻。それはさうとエヂトの二親は誰なのだい。

少女。だつてお母あさん、あんまり吃驚りなすつてはいやよ。

妻。いふからお云ひ。

少女。あのエンミイとお父うさんなの。(言ひ畢りて重荷を卸したる如く。)とうとう云つてしまひましたわ。

妻。(詞しごろに。)あのエヂトの二親はエンミイとお父うさんだといふのだね。

少女。お母あさん。そんな顔をなすつてはいやよ。どうぞそんな顔をしないのでめて下さい。

妻。(氣味悪きやうに落付きて。)好いよ。わたしは平氣なのだよ。お前はそれをわたしが始めて聞いたのだと思ふのだらうがね、それは大變に違つてゐるのだよ。そんなことならお母あさんはさうから知つてゐたのだよ。だがお前はさうして知つたのだえ。

少女。どうしてさ云つたつて、分かつてゐるぢやありませんか。あいつは今でもお父う様のお妾をしてゐるのですもの。

妻。まあ。この子は。

少女。だつてあんな女のごとはさういふのでせう。ホルストをぢさんもさう云ひましたつけ。

妻。ほんにこんな子供にまでそんな詞を聞かせたり、云はせたりするやう



になつたのか。

少女。お母あさん。わたしもう赤さんではないわ。わたしばかりではありませんの。エヂトだつてもう鶴こづつが赤さんを銜へて飛んで来るなんぞいつたつて本當だとは思ひませんわ。ねえさうでせう。丁度植物で花に雄蕊おとね雌蕊があつて實がなるやうに人間の子も出来るのですわね。お父う様とあの女どキスをしてゐるのはわたしも見てよ。

妻。本當にそれを見たのかい。

少女。ええええ。たび／＼見てよ。

妻。どこで。

少女。大抵晩方にお庭でしてゐましたの。それから一度は。ああそれは云はないで置くの。あんまりいやらしいから。

妻。好いからお云ひ。

少女。でも云はれないわ。

妻。そんな事を隠すのはそれをしたのと同じことなのだよ。好いから云

つておしまひ。お前はわたしの子ではないか。

少女。(言ひ淀みつゝ) 去年の事でした。大分遅くなつてもう外のものは寝てしまつてゐましたの。わたしはこの卓の上に雑記帳を忘れて置いたのをふいと思ひ出しましたの。それで明りを付けずに取りに来ましたの。もうランプはみな消してあつて、この部屋は平手で顔を撫でられるまで、その手が見えない位眞つ暗でしたの。わたし雑記帳を手搜りで目付けてそれを持つてまた二階へ登りましたの。その時。

妻。その時どうしたの。跡をお云ひ。

少女。その時あそこのお父うさんのお休みになるお部屋の戸が開いて、お父うさんが出て入らつちやいましたの。わたしちつこして動かすに見てゐましたの。さうするとお父う様は知らずにわたしの前を通つて、あそここのエニミイの寝てゐる部屋の戸の所へ行つて立ち留まつて、そつと戸を叩いて入らつちやいましたの。

妻。さう。

少女。さうするとあの女が戸を開けました。女の部屋には明りが付いておりました。わたしには二人の様子とその明りではつきり見えませんでした。あの女は襦袢一つになつて髪をほごいて素足でおりました。そしてお父さんの頸に手を搦んで、あなたよく入らつてねと云ひましたの。

妻。さう云つたのかい。

少女。ええ。さう云ひました。その聲がまだはつきりわたしの耳に残つてゐますの。お父うさんは這入つて入らつじやる。女が戸を締める。直ぐその跡で戸に錠を卸す音がしましたの。それからわたし、そつと寝に戻りましたの。それから寐ようと思ひましたが悔しくつて溜まらないでせう。聲を立てまいと思つても聲が出て來ます。若しエヂトが聞いて目を覺ますと悪いと思つて、わたし枕に顔をびつたり押し付けて朝迄泣いてゐましたの。それから夜になると又お父うさんがあんな事をなさるだらうと思ふと悔しくつてならないので、毎晩毎晩泣きましたの。そして夜が明ければわざと面白さうな顔をしてゐましたの。そんな思ひをしてそれを誰にも話す事が出

來ないのですもの。

妻。(身を起す。) 好いとも。爲返しはして見せる。

少女。(驚きたる様子。) お母あさん。

妻。(氣の狂ひたるやうに目をきよら付かす。) この子の泣いた二十倍わたしが向うを泣かせてやる。

少女。お母あさん。

妻。これまでわたしは自分の事を七つの劍の女だと思つてゐたが、これからは改めて七つの劍の女になる。

少女。お母あさん。あなたどうしようと思つて仰やるの。

妻。なに。こはがらなくても好いよ。劍なんぞと云つたつて、それは譬にいふのだから。

少女。ねえお母あさん。そんな事をわたしが云つたのが向うへ知れるやうになすつては厭よ。好いでせうね。

妻。(氣を取り直したる様子。) おう、おう。なんのわたしがちつとでも向

うに氣取られるやうな事をするものかね。

少女。わたしはあの女の事をお母あさんには話さないと、お父うさんに誓つてゐますの。ですからお父うさんにも云つては厭よ。

妻。お父うさんにも云はないよ。心配をおしでない。

少女。ほんこにわたしひどく動悸がしますの。あんまり逆せたもんですから、お父うさんに誓つた事も忘れて話してしまひましたの。

妻。なに。誓はお父うさんが一番先に破つて入らつしやるのだからね。

少女。いええ。さうは参りませんわ。わたし大變な罪を犯しましたの。死ななくては濟まないやうな大變な罪を。

妻。なに。そんな事があるものかね。お前がそれを云はずに置けば、お母あさんを騙してゐるのだ。その方が罪としてはよつぽど重い。物を盗んでゐる罪もその盗人をかくまふ罪も同じやうなものだからね。

少女。ねえお母あさん。氣取られないやうにして下さいよ。

妻。心配をおしでないよ。なに氣取られるものかね。旨く狂言をして見

せるよ。あの女が出て來たら機嫌よく笑つて見せて可笑しい話でも爲掛けてやらう。お母あさんがどんなに旨まく狂言をするか、お前は傍で見とお出で。

(少女忽然耳を欬て、奥の方を見る。)

少女。(小聲に。)來てよ。

妻。誰が。餘所の人かい。

(少女前房の戸口に走り行き外を見る。)

少女。いええ。お父うさんとエンミイとホルストをぢさんと三人なの。

お父うさんは大層心配らしい顔をしてゐますの。エンミイは泣いてゐますの。

妻。エンミイも來るのだね。そしてホルストも。

少女。ホルストをぢさんは今エヂトの鞆がらんこをしてゐる所へ行きましたの。

お父うさんとエンミイとがこつちへ來ますの。

妻。あのわたしは部屋へ歸つて泣いたのが知れないやうに顔を洗つて來

るからね。それから面白く狂言をして見せるから、お前も待つてお出で。

(妻客間へ退場。前房の戸口より主人とエンミイと登場。エンミイは泣顔をなみぬる。さてエンミイは詞無く我が部屋に入り、戸を鎖す。主人は氣力全く沮喪したる如く、急に一二年も年を取りたる様子になりぬる。主人は前屈みになりて歩めり。聲音異様になりぬる。空虚にて調子低く、微なる聲なり。少女父の側に坐す。)

主人。ミルラや。お前は己が小言でも言ふだらうと思つてゐるかも知れないが、そんなことはしないよ。小言を言へば己が己に云はなくてはならないのだ。何もかもお前の知つた事ではない。みな己が悪かつた。己は罪人だ。お前はまた子供だから、自分のする事が分からない。飛行機を壊したのも、それがどれ程の価値のものか知らずに壊したのだから。

少女。(少しあらがふ心持にて。)でもお父うさん。飛行機の価値よりは、わたしお母あさんの健康の方が価値が大きくはないかと思ひますの。

主人。それはさうさ。さつきは己もつひ腹が立つたもんだから、お前のお

母あさんにあんな荒い事を云つたのだが。

少女。ええ。癲狂病院と仰やつたのね。

主人。あんな事を云つたのは實に己が悪かつた。己はひどく後悔してゐるのだ。

少女。お父うさん。あなたほんとお母あさんを惨酷になすつたわ。あなたお母あさんにあやまらなくては悪いわ。

主人。お母あさんにもあやまる。お前にもあやまる。お前達みんなを不幸に陥れたのだから、己はみんなにあやまらなくてはならない。(間。)ベッツェンベルグ教授は立つてしまふ。外の委員も厭な顔をする。何もかももう駄目だ。何年も何年も望んでゐた目的が手に取るやうになつた時、どうとう破滅してしまつた。水に溺れようとするものが、一本の草にでも一じよう懸命かちり付く様に己はあらゆる手段を盡して奮闘した。經濟上にも随分思ひ切つた事をした。(間。)ミルラや。察してくれ。お父うさんは身代限だ。少女。(煩悶する様子。)まあ、お父うさん。本當なの。

主人。己の財産を無くしたばかりではない。お前のお母あさんのもの、エン  
ミイをばさんのもみな無くなつてしまつたのだ。  
少女。(さもせつなげに泣く。)それほどの器械なのをわたしが壊してしま  
つたのね。

主人。それがお前に分かつてゐる筈がないのだ。兎に角己が悪かつた。  
少女。お母あさんはあの通り體が弱くて贅澤に暮した人ですから、お内が  
貧乏になればお母あさんが又病氣になるかも知れませんか。

主人。うむ。己は罪人だ。

少女。(いよゝ、煩悶する様子。)ねえお父うさん。なんぞか爲様はないで  
せうか。誰か助けてくれる人はないでせうか。

主人。ないよ。誰もないよ。かうした運命だと思つて諦めるより外はな  
い。  
少女。(聲を上げて泣く。)まあわたし飛んだ事をしましたわね。飛んだ事  
を。

(間。)

主人。己は何よりもお前のそんなに泣くのを見るのがつらい。それより  
つらい事はない。ミルラや。どうぞ泣いてくれるな。

少女。(涙の中にて稍落付く。)お父うさん。わたし思出した事があるわ。  
わたしもお祖父い様から戴いた財産がありましたつけね。あれをお父うさ  
んに上げてほしいでせう。

主人。おうおう。好い子だ。よくそこまで気が付いた。だがね、お前はま  
だ丁年になつてゐない。

少女。丁年にならなくてはいけないの。

主人。さうだ。お前の財産は裁判所に保管してある。丁年にならなくて  
は手を付ける事が出来ないのだ。

少女。でもお父うさん、わたしが死んでしまつたらあの財産はお父うさん  
のものになるのでせう。さうでせう。

主人。(ためらふ。)お前が死んだらさういふのかい。

少女。ええ。わたしがいふと死ぬといふ事もあるかも知れませんが。さうなればあの財産が遺産とかいふものになつてお父うさんの手に渡るのでせう。

主人。(甚しく激したる様子。)こりや。ミルラ。お前は何を思つてゐるのだい。その今思つた事を云つて御覽。

少女。いゝえ。なんにも思やしないわ。

主人。嘘を衝くな。隠しても分かつてゐる。途方もない。

(少女再び聲を上げて泣く。)

少女。(夢<sup>む</sup>ちゆうになりて泣きつゝ。)ええええ。わたし死なうと思ひますの。死ななくてはなりませんの。生きてはゐられません。みなわたしのしたことですもの。わたしのしたことの爲めにお母あさんもお父うさんも不爲合せにおなりなさる。ようございます。わたし死んで見せます。お父うさんが死なせまいと思つたつて、きつと死んで見せます。

(主人少女の臂を掴み揺する。)

主人。(嚴しく責むる調子。)こりや。ミルラ。なんといふ事だ。お前は病氣になつたのだ。しつかりしろ。そんな事をさせるものか。

少女。(泣きつゝ。)いゝえ。しますわ。お父うさんがせまいと思つたつて、わたしきつとして見せます。

主人。ミルラや。好い子だから、そんな事を云つてくれるな。そんな事はしないとどうぞ己に誓つてくれい。よ。よ。己の云ふ事を聞くだらうね。ミルラや。

少女。(顔を上げ、うつとりしたる様子にて。)お父うさん。なんと仰やつたの。

主人。あのな、お父うさんは身代限にならなくても好い事がある。

少女。(涙の中に顔色輝く。)ならなくても好いの。どうなされば好いの。

主人。爲方<sup>しかた</sup>があるのだから、もうさつきのやうな事を云ふのではないよ。好い子だからな。

少女。爲方とはどうなさるの。それを云つて下さいよ。

主人。たつた一つの爲方があるのだ。己が人に頭を下げる事が死ぬより厭なので、今までそれをせずにある。實はリッヒャルドをぢさんが己を助けてくれようといつたのを、己が厭だといつたのだ。其時の考では縦へ杖を引きずつて乞食をして歩いてても頼むとは云ふまいと思つたのだ。かうなればあれに頼む。直ぐに手紙を書いて出さう。あれは手紙を待つてゐるのだ。

少女。(顔色輝く。)その手紙をお書きなさるの。それで身代限にならなくても済みますの。

主人。うむ。そんな事にはならずに済むのだ。もう己も飛行器を拵へようとは云はない。どうなるものか。爲方がない。(間。)つひお前達と氣樂にこの世を渡つて行かう。(間。)なせ又泣くのだい。

少女。(涙聲。)これは嬉し泣きよ。わたし嬉しくてじやうがないのですもの。本當にさうなると好いわ。

主人。もうさつきのやうな事をいふのではないぞ。(間。)ごりや。行つて手紙を書かう。

少女。それよりがちよつとお母あさんの所へ行つてキスをして上げて下さい。よくつて。

主人。(客間の方を向く。)うむ。さうしよう。(間。)エロニカにさう云つて置け。支度をしろつて。手紙が出来たら直ぐ持たしてやるのだから。

少女。(父に飛付く。)お父うさん。わたし嬉しくつてよ。嬉しくつてよ。

第 四 幕

舞臺は前幕の通り。同日の午後十時頃。○主人アンセルム、妻サビーネ、世話娘エンミー、醫學士ホルスト、少女ミルラ、孤兒エドト、夕食を終りて、まだ片付けざる食卓に坐しゐる。果物を盛りたる鉢。飲干したるシャンパン瓶。同じ酒を一ぱいに注ぎ、又は半ば飲みさしたる盃。これらみな卓の上にある。一同わざと愉快げに見せんと骨折る様子。孤兒は醫學士の膝の上に攀ち上ばりゐる。

學士。(孤兒に。)もう下りないか。困つた小僧だぞ。

孤兒。その鼻眼鏡を鼻の先の所へ載せてお見せよ。載せなくつちや厭。

學士。(笑ふ。)うるさく搦む小僧だな。五爪龍ごつかろうのやうな奴だ。アンセルム君。こいつを下ろしてくれ給へ。僕はもう行かなくちやならん。

孤兒。あら。をかしい。

主人。何がをかしいのだい。

孤兒。ホルストをぢさんの鼻の上には睦が生えてゐる。

主人。(わざとらしく笑ふ。)妙な事をいふ奴だな。鼻の上の睦は好い。まあそれを飲んでしまひ給へ。(盃を舉げて自分も飲む。)

世話娘。あなた。そんなに澤山あがつては悪いでせう。跡でお工合が悪いといけません。

主人。なに。今日はミルラが誕生日ぢやないか。

妻。ホルストさん。まだ好いちやありませんか。そんなに遅くはございません。

學士。もう十時を過ぎてゐます。今からしなければならん爲事がありま

す。僕なんぞはどうしても業務の奴隷ですよ。

妻。今夜これからお爲事をなさるのですか。

學士。何か書かうと思ふと夜でなくては書けないのです。本屋がそろそろ苦情を云ひ出してゐますからね。一體原稿を十五日迄に印刷所へ廻す筈になつてゐたのですから。

主人。馬鹿な事をいひ給へ。そんな著述なんぞは紙屑籠へ入れてしまへば好いちやないか。一體近來出版物が多過ぎる。(間。)著述をする。大家になる。そんな事は外のものにさせて置くが好いのだ。その爲事が是非君でなくてはならんといふ理由もあるまい。兎角酒の事だ。まあそれを飲んでしまひ給へ。

孤兒。(妻に。)をばさん。ホルストをぢさんが何を書いてゐるのだから、あなた知つてゐて。

妻。(學士に。)無論醫學上の著述でせう。

孤兒。さうぢやなくつてよ。腹の蟲の事を書いてゐるのですつて。



世話娘。まあ。この兒は。なんだつて途方もない事をいふのだらう。  
 孤兒。本當だわ。をぢさんがさう云つたのだもの。アルコオルに漬けた  
 腹の蟲を持つてゐてよ。わたし見せて貰つたわ。  
 主人。餘程蟲が氣に入つたと見えて、こなひだからあんな事ばかり云つて  
 ゐる。

孤兒。氣に入つたのぢやないわ。(間)それからをぢさんの所には赤ん坊  
 の死んだのが澤山アルコオルに漬けてあるのよ。その中で首の二つある赤  
 ん坊がゐてよ。首が二つなの。

世話娘。好いよ。分かつてゐるからちよつとの間黙つてお出でよ。

學士。奥さん。あなたの御健康を祝して、この盃を飲み干して、それでお暇  
 乞としませう。あなたがこんなにすつかり直つてお歸りになつたのを拜見  
 して、僕はどの位嬉しいか知れません。

(學士はサビイネと盃を打ち合せて飲み干す。主人も盃を舉げて妻に見  
 せて飲む。主人又學士の盃に酒を注がんとす。)

學士。(手にて盃に蓋をなす。)もうおしまひだ。許してくれ給へ。(妻の  
 に接吻す。)奥さん左様なら。失禮ですがこれで。

妻。おや。さうですか。どうぞ相變らずお心安く願ひます。御隣家の事  
 でもございますじ。

學士。それは僕の方から願ひたいのです。(世話娘の手に接吻す。)エンミ  
 イさん、左様なら。(子供等に。)大人しく寐るのだよ。おい、エヂト。腹の蟲の  
 夢なんぞを見るのぢやないぞ。こら、人をつねつてはいけないうぢやないか。  
 しやうのない奴だ。ミルラも好く寐るが好い。夜遅くなつてから本を讀ん  
 ではいけないよ。一體己の自由になる事なら、あの本を皆どこかへしまつて  
 錠を卸してやりたい位なものだ。(主人に。)アンセルム君。ちよつとそこい  
 らまで来てくれたつて好いだらう。

主人。そりやあ行くさ。酒を飲んだ跡は少し外の空氣にあたる方が好い  
 から。

世話娘。でも、あなたまでゐなくなつておしまひなされると跡があんまり寂

しくなりますわ。

妻。(學士に。)さうさう。あのヨオドアユニットを一瓶下さる筈でしたね。どうぞお忘れにならないやうに。

學士。あ。さうでしたね。もう少しで忘れる所でした。アンセルム君。君が送つて来てくれれば直ぐに持つて歸つて貰ふのだが。

少女。お父うさん。お休みなさい。

主人。なんだ。もう寐に行くのかい。まあ己の歸るまで起きて待つてゐろよ。

學士。(主人に。)そんな事をいつては困るぢやないか。子供は十分寐なくてはいけない。あのミルラの顔を見給へ。睡眠が足りないので、神經過敏になつてゐるのが、好く見えてゐるぢやないか。

世話娘。それに明日は午前八時に理化學の時間があるのです。宵つぱりをさせて置く朝になつて起きなくて困ります。

主人。好い、好い。そんなら寐るが好い。ミルラもエヂトも行つてお寐。

(ミルラに接吻しつゝ中音にて。)床に這入つてからいろんな事を考へてゐるのぢやないよ。直ぐに寐るのだよ。好くわけの分かる子だからさうするだらうね。好いかい。

少女。(父に接吻しつゝ)ええ。わたしすつかり安心してゐますわ。それから難有うよ。あのホフマンだのミュッセエだの色々下すつて難有うよ。

學士。(妻を指さし、少女に。)併し一番好い貰ひものはこのお母あさんだらう。だしぬけに好いお土産を貰つたといふものだけ。

少女。だしぬけではないわ。わたし片時も忘れてはゐなかつたのですから。

妻。(笑ふ。)まるでそんなに云はれるとわたしはお菓子のお袋か何かのやうね。ホルストさん。なせお笑ひなさるの。この土地では婆あさんの事をお袋といふのに、わたしが今お菓子の袋とさういつたからでせう。

學士。なにそんな失敬な事を考へるものですか。お菓子の袋ならおしいものでさあ。

主人。お世辭が好いな。

妻。ええ。さぞわたしはおいしいでせう。

少女。(妻に抱き付く。)おいしいお母あさんだわ。

主人。ミルラがおいしいといへば間違ひはあるまい。

學士。さうさ。こいつ中々口が贅澤なのだから。

主人。さあ行かう。

世話娘。どうぞお早くお歸りなすつて。

(主人と學士と園へ退場。)

孤兒。(世話娘に接吻しつつ。)エンミをばさん。お休みなさい。(妻に)

サビイネをばさんもお休みなさい。

妻。(エヂトに接吻す。)よくねんねおじよ。

少女。(世話娘と握手す。)お休みなさい。

孤兒。(世話娘に。)ラジブを消しに来ておくれよ。

世話娘。(孤兒に。)行つて消してやるからね。まあ、ねまき寝衣を着替へてお出で

よ。

少女。(妻に。)お母あさん。お休みなさい。(呟く。)約束した事を忘れては厭よ。

妻。(小聲に。)忘れはしないよ。(聲高く。)行つてお寢。

(少女と孤兒と梯子を上ぼり、二階左手の寢間へ行く。)

妻。あのエヂトといふ子は可哀い子ね。

世話娘。さう。

妻。ええ。

世話娘。今頃は丁度背の伸びる最さいちゆうですからあんなですが、二つ位な時はもつと好い子でした。

妻。どこかしつかりした所のある子ですね。

世話娘。でも、いたづらばかりして中々綺麗にしては置けないのです。

妻。それに賢さうね。

世話娘。ええ。馬鹿ではありませんの。

妻。目付がおつ母さんそつくりですね。

世話娘。ええ。みんながさういひます。

妻。それに横顔も似てゐますね。それから何かしてゐるのを見ると、その素振が似てゐますよ。あなたはルイイゼさんを見た事があるでせう。

世話娘。子供の時好く見ましたの。あのオオエルベックさんの所に片付いてからは直ぐに越して行つてしまつたものですから、めつたに逢ひませんでした。併しエドトがお母あさん似たといふことは、誰でもさういひます。

妻。さうでせう。父よりは母に似た子ですね。

世話娘。ちよつと御免なさいよ。わたしが行つて一じよにお祈りをしてやらなくては、エドトは寐付かないのですから。

(世話娘梯子を上ばり、二階左手の子供の部屋へ行く。妻立ち上がり、あちこち歩く。さて時々立ち留まり、二階を仰ぎ見て耳を傾く。又あちこち歩く。そのうち世話娘子供の部屋より立ち出で、梯子を降る。妻は世話娘の出で来るを見て直ぐに腰を懸け、酒を一ぱい注ぎ、飲み干す。)

妻。子供はまだ寐入りませんか。

世話娘。草臥てゐたと見えて二人とも直ぐ寐ました。

妻。エンミイさん。あなたは聖書にある古い話を知つてお出でですか。

世話娘。ええ。少しは知つてゐます。なせですか。

妻。わたしは病院にゐて、一年程の間聖書を讀んでゐましたの。わたしにはあの飛行機といふものが變に思はれますの。

世話娘。へえ。

妻。あのレアの林檎のやうに。

世話娘。レアの林檎とは。

妻。レアが林檎を持つてゐました。それをラヘルが欲しがつたのでせう。その時レアがかう申しました。汝は我が夫を奪ひて飽き足らず猶我が林檎をも奪はんとするかと申しました。

世話娘。分かりませんわ。それにわたくしそんな事は分からせたくもございませぬの。

妻。(二階の右手を指さす)あなたはあの部屋でお休ですか。

世話娘。ええ。

妻。そしてアンセルムはあの部屋で休むのですね。

世話娘。ええ。

妻。それではわたし相談があるのですが。今夜だけわたしにあなたの部屋を貸して下さいますまいか。

世話娘。そしてわたしはどこに休んだら宜しいのでせう。

妻。あなたはあのわたしの荷物の置いてある客間に寝てお貰ひ申したいのです。

世話娘。なせでせう。

妻。只今夜一晚の事ですから。

世話娘。どうもそんな事は出来ません。

妻。なに。しようさへ思つて下されば出来ない事はない筈です。ラヘルもレアをふびんだと思つたのでかう申しました。よし。彼の林檎の爲め

に今宵一夜はヤコップをして汝の所に眠らしめんとさう申しました。

世話娘。そのあなたのお詞はなんだかわたくしに御疑念があつて、それですらう仰やるのかと思はれますが、わたくしは身に覺えのない事ですから、そんな御相談には乗られません。

妻。(次第に激し詞急になる)エンミイさん、まあ聞いて下さいよ。あなたが御馳走の澤山ある食卓に就いてお出での所へ、哀れな乞食が飢渴に迫つて這入つて来て、只一切れのパンを貰ひたいと申すのですね。あなただつてもやそれをやらないとは仰やいますまいね。御覽の通り、わたしも飢渴に迫つてゐて一切れのパンを乞ふのです。何年も何年もそのパンを欲しがつてゐたのです。エンミイさん。わたしもまだ若い女だ。靈も體もパンを求めます。わたしの體にはまだ血が流ますに旋つてゐます。わたしもまだ男が戀しい。エンミイさん。耻を忘れて願ふのです。乞食の様に願ふのです。もう権利だのなんだのとは云はないで乞食のやうに願ふのです。その一切れのパンですから、どうぞ厭だと云はないで下さい。只一晚の事ですから。

世話娘。わたくしはあなたの御亭主を奪つた覚えはございません。

妻。エンミイさん。わたしがかう云ふのには、ごれだけ自分で自分を抑へて、我慢していふのだから、あなたにだつて分かるでせう。わたしはこれほど氣を落付けて御相談をするのです。わたしだつてこの外に云ひたい事は澤山ある。それを堪へていふのです。ねえエンミイさん。たつた一夜の事だから、聞いてくれてもいいでせう。

世話娘。そんな途方もない事はわたくしには出来ません。

妻。(聲を張り上げ) あなたの取つたわたしの夫を貸さないといふのですか。

世話娘。誰があなたの御亭主を取つたなんぞといふのですか。

妻。(叫ぶが如く) お前さんが取つてゐます。

世話娘。成程。さう仰やればわたしも云ひます。如何にもわたしが取りました。併し、それを取るまでには、わたしもごれだけか涙を翻し、血を流して取りました。わたしの若い容貌をもわたしの大事な貞操をも犠牲に供して

取りました。あのお方に氣に入るやうにご耻辱の棘の冠を戴く事をも否まずに、今のやうな日蔭者にさうさうなつてしまひました。ありふれた世の中の禮儀であなたがお取りになつたその夫には幸福が無くなつてをつたのを、わたしが耻辱で横取りして、そのお方は幸福を得られました。あの方の爲めに何物を犠牲にしたかといふ事を考へて御らん下さい。わたくしの犠牲が千萬倍です。従つてわたくしの権利が大きいのです。

妻。(世話娘の喉を右の手にて掴む) こちや。ばいた奴が。よくも夫を疑取つたな。

世話娘。(もがく) 放して下さい。

妻。(手に力を入れる) かうなればもう赦さぬ。知るまいと思はうが、何もかも知つてゐる。エヂトはお前の生んだ子だね。覚えてお出で。かうして締め殺してしまふから。

世話娘。(苦しき息をつく) 人殺し。アンセルムさん。人殺し。

妻。好いとも。たんと呼んで見方が好い。薄情男を呼ぶが好い。駈け付

けて来るまでには、お前の命は貰つてゐる。

少女。(寝衣の襦袢一つになりて寝間より駆け出で、梯子の上に立つ。) お母あさん。どうなさるの。

妻。殺すのだよ。わたしは此手は放さない。ばいた奴。死んでしまへ。

(主人前房の戸口より駆け入る。少女恐れて一旦寝間に駆け込み、これより後折々見に出で、欄干まで覗く。主人は妻に飛び付き、無言にてすまひ、妻の手を世話娘の頸より放す。世話娘のよろめくを主人支へて椅子に掛けさす。世話娘人事不省にて、椅子の上に倒る。)

世話娘。(暫くありて氣付く。) も少しで息が留まるかと思ひました。

主人。もう好いか。

世話娘。段々好くなるやうでございます。

主人。何か飲まないか。

世話娘。恐れ入りますが、(間)水を。

主人。酒が好い。シエリイがある。さあ。

(一ばいの酒を飲ましむ。世話娘飲む。)

世話娘。(小聲に。) また起つたのですよ。恐ろしい事。

主人。(小聲に。) もう己がゐるから大丈夫だ。

世話娘。(小聲に。) なんといふ目をじたでせう。早くお醫者をお呼びなさいまし。

主人。(小聲に。) エロニカは。

世話娘。(小聲に。) まだ歸りませんの。

主人。(小聲に。) そんなら己がホルストを呼んで来よう。併し待てよ。(聲高く。) サビイネや。どうしたといふのだい。

妻。どうもしや致しません。わたしははつきりしてゐます。

主人。お前は神経質になつてゐるのだ。馴れない汽車に乗つたり、久し振りでみんなに逢つたりしたのだから、それは無理はない。だからな、これから一寐入りするが好い。

妻。まあ。そんな事をいつてわたしを寐かして置いて、跡で勝手な事をな

さるのですね。あなたは姦夫です。何もかも知つてゐます。あなた方はわたしを癡狂だといつて、明日又病院へやらうと思つてゐなさるのでせう。駄目ですよ。わたしは病院にやられるまでに復讐をしますから。一旦この手で搦んだ獲物をわたしはきつと殺して見せます。

主人。(宥むる調子。)お前は神経過敏になつてゐる。一寐入して見るが好い。一體今日一日の出来事が多過ぎたのだ。それでそんなになつたのだ。

妻。ええ。こんなになりましたよ。

主人。まあ體を大事にしなくては。

妻。誰がわたしを大事にしてくれたでせう。

主人。さう詞尻ばかり取つてゐてはいけない。そんな調子でゐると、又病氣が出ようも知れぬ。さあ、さあ。氣を落付けて少し休んでゐるが好い。己と一しよにこつちへお出で。

妻。さうですか。分かりました。ええ、ええ。わたしはあなた方のお邪魔なんぞはしたくない。わたしがかうして起きてゐるのが、お二人ともさぞじ

れつたくつてならないでせうね。もう参ります、参ります。左様なら。ははは。ロミオさん。左様なら。ジュリエットさん。左様なら。たんと二人でお楽しみさい。左様なら、左様なら。

(妻は幾度も腰を屈めて二人に禮をなし、ヒステリ性の笑ひをなしつつ客間へ退場。)

世話娘。まあ。本當の躁狂といふのですね。

主人。これまでにない劇しい發作だ。直ぐにこれからホルストを呼んで來なくちやあ。

世話娘。(心配げに。)どうぞわたしも連れてお出でなすつて下さい。

主人。なに。そんなに心配しなくても好い。内を子供ばかりにして置かれはしない。もしあの様子で火なんぞを付けられては大變だ。直ぐに歸るから、お前はこゝに待つてお出で。

世話娘。でもわたし恐ろしくてしやうがありませんわ。又あんな事をするかも知れませんか。さつきもきつと殺すとさう云つたでせう。



主人。さうさな。好い事がある。お前は自分の居間へ這入つて戸に錠を卸してゐるが好い。己はこのランプを消して出るから、サビイネはみんな寐たのだと思ふに違ひない。まさか女の方で戸の錠前をこはす事は出来まいから。

世話娘。そんならどうぞ早くお歸りなすつて。わたしこはくつてなりませんから。

(世話娘右奥の居間へ退場。内より戸を締め錠を卸す音す。主人燈を消す。扱前房の戸口より退場。扱前房の戸の硝子と二階の窓の硝子とより月の光さし込み、梯子の一部明る、なりある。今迄度々欄干迄覗きに出てし少女主人の燈を消すを見て、忙がしげに二階左手の寐間に入る。暫くの間舞臺空虚なり。次いで客間の戸あく。妻拔足して登場。手探りにて月の光のさしある梯子の所に歩み寄る。其間度々立ち留まりて物音を聞き定む。さて梯子を上ぼり子供の寐間の戸を叩く。)

妻。(小聲に。)ミルラや、ミルラや。おあけ。

少女。(戸を細目にあく。)ごなた。お母あさんなの。

妻。わたしだよ。ちよいと出してお出で。

少女。着物を着なくても好いの。わたし襦袢一つだけ。

妻。その儘で好いよ。早くおし。

(少女髪をほごき、襦袢一つになりたる姿にて、足にスリッパを穿き登場。妻その手を取り、忙がしげに引き摩るやうにして梯子を下る。)

少女。(色蒼くなり、顔ひる。)ごうするの。

妻。逃げなくちやあ。お前は連れて行くのだ。

少女。ごこへ行くの。

妻。ステーションへ。イタリアへ逃げるのだから。

少女。あのイタリアへ。

妻。イタリアでなければギリシャへ行くのだ。そんな事は汽車に乗つてからどうでもなるのだよ。エジプトまで行つて金字塔を見ても好い。

少女。だつて、お母あさん、あなたひどくのぼせて入らつじやるのね。少し

落付いて下さいよ。

妻。なんの馬鹿な。のぼせてなんかあるものかね。こんなに落付いてあるぢやないか。(間)それはさうとあのエヂトはお前と同じ部屋に寐てゐるかい。

少女。ええ。なせそれを聞くの。

妻。お前にだけいふのだがね。お前はわたしの味方だから。ほんとにわたしの味方さいふものは世界ちゆうにお前じかない。だからお前にいふのだよ。人にいふのぢやないよ。敵に洩れてはならないから。わたしはあのエヂトの首を切つてやるからね。

少女。あら。そんな事をしては厭よ。まあまあ。どうしたといふのでせう。ねえお母あさん。只さう仰やるのでせう。本當にそんな事をするのではないでせう。

妻。なに。本當にするのだよ。跡で汽車に乗つてからよく話して聞かせるがね。最初はあのエンミイを殺してやらうと思つたが、それでは詰まらな

いのだよ。死んでしまへば痛くも苦しくもないからね。それでは殺し損だからね。それよりはあのエヂトを殺してやる。さうしたらあのエンミイがどんなにかつらいだらう。焼金をあてられるやうな苦痛の味を覚えるだらう。丁度わたしが渡つたやうな苦痛の海を渡るだらう。それで帳消しになるのだよ。

少女。(妻に取り付く)お母あさん。そんな事はお止どしなさいよ。どうぞお願いだから止して下さい。わたしがかうして頼むから。(跳く)どうぞ殺さないで下さい。

妻。邪魔をおしてない。貴重な時間だからね。ギリシヤまで逃げるのだから。(間)これからちよいと庭へ出て裏門があいてゐるか見て置かなくちやあ。もし裏門が締まつてゐればステーションまで逃げるのに二人で垣を越さなくてはならないからね。さあ、その手をお放しよ。

少女。(身を床に倒す)どうぞお願いだから殺さないで下さい。

(妻は少女の搦むを振り放し、前房の戸口より退場。少女は梯子の下に倒

れたるまゝ暫く嘔り泣きしてゐる。さて身を起し、跪き、祈る。

少女。(詞もござるに。)神様。わたくしは悪うございます。時々あなた  
の事を疑つた事がござります。度度お祈りを忘れてゐました。これからはさ  
つとお祈りを忘れないやうにいたします。これからはあなたの天にお出で  
なさる事を決して疑ひは致しません。あなたがお出でなさらない筈はござ  
いません。どうぞお助け下さいまし。あなたでなくては助けて下さる事は  
出来ません。お父うさんはお留守です。わたくしはどういたしたら宜しう  
ございませう。わたくしは罪のある女でございます。神様。お母あさんが  
氣の違つたのは、わたくしが悪かつたからでござります。もしエヂトが殺さ  
れれば、それもわたくしが悪いからでござります。神様。天にお出でなさる  
神様。どうぞわたくしの罪をお赦しなさつて下さいまし。そしてわたくし  
がエヂトの身代りになつて死ぬるのをお許しなさつて下さいまし。わたく  
しは死にたいのでございます。神様。どうぞわたくしの罪をお赦しなすつ  
て下さいまし。お助けなすつて下さいまし。

(二階の子供の寝間の戸あく。孤兒襦袢一つになり、素足にてそつと出で  
来る。さて梯子の上に立ち留まる。)

孤兒。ミルラさん。

少女。ええ。エヂトさんなの。なせ寝ないの。

孤兒。(梯子を下る。)あなた、誰とお話しをしてゐるの。

少女。誰もゐないの。

孤兒。だつて何か云つてゐたでせう。

少女。わたし詩を譜記してゐたの。

孤兒。なんの詩。

少女。「いもうとよ、いもうとよ」といふの。

孤兒。あら。それは詩ではないわ。歌だわ。

少女。そんなら歌。

(少女殆ど聞き取り難き聲にてうたふ。○その歌。)

「いもうとよ、いもうとよ。」

さがしておくれ、閨の戸を。

さがしておくれ、わが床を。

床は好い床、苦の下。」

(少女泣く。)

孤兒。あなた泣いてゐるのね。好く泣く人ね。

(前房の戸口より妻登場。少女身を以て孤兒を掩ふ。妻は少女孤兒を見ずして梯子の下を横切り、左手廊下の戸口に行く。)

妻。(廊下の戸口にて忙がしげに。)ミルラや。裏門はあいてゐたから安心だよ。わたしはちよつと臺所へ行つて庖丁を取つて来るからね。

(妻廊下の戸口より退場。)

孤兒。あれはあなたのお母あさんね。

少女。ええ。

孤兒。をかじな歩きやうをなさるのね。

少女。なにをかかしいもんですか。

孤兒。臺所から庖丁をもて来て何をするのでせう。

少女。きつとおなかかすいたのでパンを切つて上がるのよ。

孤兒。まあ、をかしい。夜遅くなつてパンを食べるなんて。

少女。エヂトさんはなせ起きて來たの。寐られないの。

孤兒。お月様が丁度わたしの枕の所にさして來たの。さうするさわたしいつでも寐られなくつてよ。

少女。あの枕の所に月がさしてゐるの。

孤兒。なせそんなにびつくりするの。

少女。(孤兒に接吻す。)びつくりなんぞさなくつてよ。月なんぞはさしてゐても好いわ。

孤兒。そんなにきつくキスをしては厭よ。あなたひどく胸を押し付けるもんだから、痛いわ。

少女。あのね、今度はわたしがお前さんの寢床に這入つて寝ようね。わた

しは月がさしてゐても寝られるから。エドトさんはわたしの寢床に這入つてお寝。さうすれば月がささないから好いでせう。

孤兒。あゝ。さうじゃませう。だけれどわたしの寢床は小さいわ。

少女。なに。曲つて寝るから好いよ。さあ行きませう。

孤兒。(少女を抱く。)ミルラさん。あなた好い人ね。

(少女と孤兒と手を取り合ひて梯子を上ぼる。)

少女。(歌。)

「さがしておくれわが床を。」

床は好い床、昔の下。」

(少女と孤兒と二階左手の寢間へ退場。暫くの間舞臺空虚なり。妻廊下の戸口より登場。右の手に肉切庖丁を持ちゐる。)

妻。(呼ぶ。)ミルラや。

(呼びつゝ梯子の方へ歩む。更に聲高く。)

ミルラや。

(世話娘の居間の戸少しあく。)

世話娘。(戸の隙より。)アンセルムさん。お歸りなすつたの。

(妻手早く庖丁を裳の蔭に隠し月のさしをらざる梯子の右手に忍ぶ。暫く動かすにゐる。稍長き間。世話娘の居間の戸少しあく。世話娘

抜足して登場。妻を見すして前房の戸口まで行き、心細く、じれつたき様子にて驚き振り返る。月のさしゐる梯子に立てる妻と顔を見合す。

稍長き間。)

世話娘。(恐怖したる様子にて。)どうしてそこに入らつじやるの。

妻。お前さんこそどうしてそこにゐるの。

世話娘。どこへ入らつじやるの。

妻。わたしかね。わたしはクリスチアニアへ行きます。

世話娘。あのクリスチアニアへ。

妻。それがをかしいのですか。お前さんの積りではイタリアの方が好い

のでせう。所がわたしはクリスチアニアの方が好いのですよ。一體スカン  
デナキアがわたし大好きです。あそこでは女が奴隷になつてゐません。わ  
たしはシイに乗る稽古がしたいのです。わたしが旅行してしまへばお前さ  
んの都合は好いのでせう。

世話娘。(恐怖に身を顫はす。)そんな事はありません。

妻。(脅かす如く。)嘘をお付きなさい。わたしの旅行するのが嬉しくなく  
てどうなのです。

世話娘。(愈々顫ふ。)ええ。嬉しうございます。

妻。それ御覽。それが正直の所だ。お前さんは正直で好いからわたしが  
好い置土産をしてやります。

世話娘。(驚く様子。)あの置土産を。

妻。まあ。好いよ。今に見せて上げるから。

世話娘。何をなさるの。

妻。(梯子を駆け上りつゝ。)今に見せて上げるよ。

世話娘。どこへ入らつじやるの。

妻。(二階にて。)わたしはエヂトの所へ行くよ。

世話娘。(叫ぶ。)あ。サビイネさん。どうぞ、どうぞ救して下さい。人殺し  
人殺し。

(世話娘梯子の下まで駆け寄り、人事不省になりて倒る。妻二階左手の子  
供の寢間へ退場。前房の戸口より主人と學士ホルストと急ぎ登場。)

學士。ここに誰かゐるせ。

主人。(近寄る。)エンミイだ。(跪く。)どうかせられたか。なんとか云はな  
いか。おい。

學士。氣を失つてゐるのだらう。

主人。(學士に。)あそこのランプをもて来てくれ給へ。

(學士急ぎて世話娘の居間に入り、火の付きたるランプを持ち來る。これ  
にて舞臺明るくなる。)

世話娘。(目を明く。)アンセルムさん。早くエヂトを助けて下さい。

主人。なに。エヂトをどうしたのだ。

(妻二階左手の寢間より登場。ゆるやかに梯子を下る。)

妻。(梯子の途ちゆうにて主人に。)あなたもうお騒ぎなさらなくても好うございます。もう済んでしまひましたから。

主人。こりや。サビイネ。お前はまさかエヂトを。

妻。どうぞ御面倒でも警察へお届けを願ひます。わたしはギリシヤへ行くかと思ひましたが、かう血まぶれになつては旅も出来ずまい。

主人。お前は何をしたのだ。

妻。あなた方がわたしの大事なものをみな取つておしまひなすつたから、わたしもその返報にあなた方の大事なものを取りました。わたしはエヂトを殺しました。

(世話娘一聲叫ぶ。學士世話娘を介抱す。主人物狂はじき様子にて梯子を駆け上る。二階左手の戸口より孤兒登場。主人孤兒を抱く。)

主人。(梯子を下りつゝ。)まだ生きてゐる。

(孤兒を舞臺前手の腕椅子に載す。)

世話娘。なんと仰やつたの。

學士。生きてゐるかい。

主人。(孤兒を改め見る。)血も何も出てはゐない。

世話娘。エヂトや。

孤兒。エンミイをばさん。あのミルラがね。

世話娘。(學士に。)どうぞ早く手當をして下さい。

主人。どうもなつてはゐないのだ。怪我はしてゐないのだ。

學士。(主人に。)まあその襦袢を脱がせて見給へ。(間。)成程。怪我はしてゐない。蚤の食つた痕もない。びんくしてゐらあ。(間。)萬歳だ、萬歳だ。

實に僕もびつくりしたよ。(妻に。)サビイネさん。笑談ちやあないせ。人を擔ぐのも好い加減にして下さい。おまけに夜なかですからね。人の寝る時ですからね。どうです。あなたもちとお休みになつては。

世話娘。(頻りに孤兒に接吻す。)エヂトや。エヂトや。

妻。エデトはさうもしてゐないのですか。

學士。びん／＼してゐます。

妻。(ゆるやかに)なに。びん／＼してゐるものですか。焼酎に漬けてある腹の蟲と同じやうにもう動かなくなつてゐます。はてな。あれがエデトでなかつたら。

(三階左手の寢間より少女登場。よろめきつゝ梯子に掛かる。襦袢の胸の所、一面の血に染まりゐる。)

孤兒。(梯子を指さす)あれミルラが。

少女。(弱りたる聲にて)お父うさん。びつくりなすつてはいやよ。わたしが、かうならうと思つたのですから。

主人。(叫ぶ)ミルラや。その血は。

(主人、學士、世話娘、妻みな梯子の途ちゆうに立てる少女に注目す。少女は色蒼ざめ、血みどれになりて立ちゐる。皆々餘りの事に麻痺したる如くなりゐる。暫くして主人と學士と駆け付け、少女を抱き梯子を下り、今ま

で孤兒を載せありし胸椅子に載す。)

主人。(身も世もあらぬ様子)ひどい出血だ。綺麗きれいな帛はないだらうか。あのテエブル懸でも好い。繃帯をしてやらなくては。ホルスト君。早く手當をしてくれ給へ。君は醫者ぢやないか。止血をしてくれ給へ。早く早く。

學士。(激しく感動したる様子にて面を背く)もう手當は届かないよ。

少女。(死に瀕して)お父うさん。おこつてはいやよ。エデトが助けたかつたのですから。お母あさんの氣の違つたのも、わたしのせいよ。ですから死ななくては。御免なさいよ。おこつてはいやよ。

(少女落ち入る。)

主人。(泣く)ミルラや。おこりはしないよ。目を明いてくれ。もう一度なんとか云つてくれ。己の顔を見てくれ。

學士。(主人の肩に手を掛く)置き給へ。もう駄目だ。我慢をするさ。

主人。(泣く)ミルラや。ミルラや。



孤兒。(世話娘に。)ミルラさんは死んぢやつたの。  
(世話娘無言にて頷く。孤兒聲を上げて泣く。○幕。)



明治四十三年十二月二十九日印刷  
明治四十四年一月二日發行

人の一生飛行機

(定價金九拾錢)

著 者 森 林 太 郎



發 行 者 和 田 靜 子

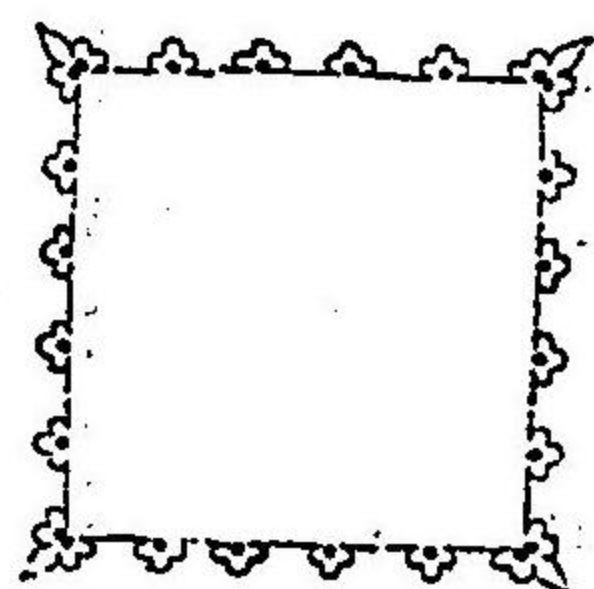
東京市日本橋區邊四丁目五番地

印 刷 者 神 谷 岩 次 郎

東京市日本橋區兜町二番地

印 刷 所 東 京 印 刷 株 式 會 社

東京市日本橋區兜町二番地



發 行 所 春 陽 堂

東京市日本橋區通四丁目五番地

電話本局五一番  
振替口座東京一六一七

# 北白能久親王事蹟

菊判美装  
クロオス全一冊  
御寫眞拾數葉入  
實價壹圓貳拾錢  
郵税金八錢

故北白川宮能久親王殿下御事蹟は特に宮家より御記録を拜借し之を基本として陸軍軍醫總監森林太郎氏編纂の任に當られ最も謹嚴に考證せられたるものなり。故宮殿下が臺灣征討の際蠻烟瘴雨の間に馳驅し給ひ遂に御病を獲て神去られ給ひし御事蹟を書けるなればは故宮殿下追憶の記念としては勿論教育上の資料として實に好個の良書たり。本會は御勳討の際部下にありし川村大將外有志の組織せるものにしてこまごま  
たび數年の調査完成を告げ是書成れるにより上梓して先づ乙覽に呈し  
發行することをば書肆春陽堂に托しつ。會員諸君及陸海軍人諸氏の爲めには特別割引すべし。

東京偕行社 棠陰會

發賣元

東京市日本橋通  
振替一六一七番

春陽堂

鷗外森氏著

水沫集  
實價金壹圓五拾錢  
小包料金拾貳錢

うた日記  
實價金壹圓五拾錢  
小包料金八錢

即興詩人  
實價金六拾錢  
小包料金八錢

東京春陽堂發行

鷗外森氏著

審美極致論

實價金參拾錢  
小包料金四拾錢

人種哲學梗概

實價金六拾錢  
小包料金四拾錢

黃禍論梗概

實價金參拾錢  
小包料金四拾錢

東京春陽堂發行

鷗外森氏著

ハウプトマン

實價金八拾錢  
小包料金六拾錢

阿育王事蹟

實價金壹圓五拾錢  
小包料金拾貳錢

審美綱領

實價金六拾錢  
小包料金四拾錢

東京春陽堂發行

21302

鷗外森氏著

東京方眼圖

實價金六拾錢  
小包料

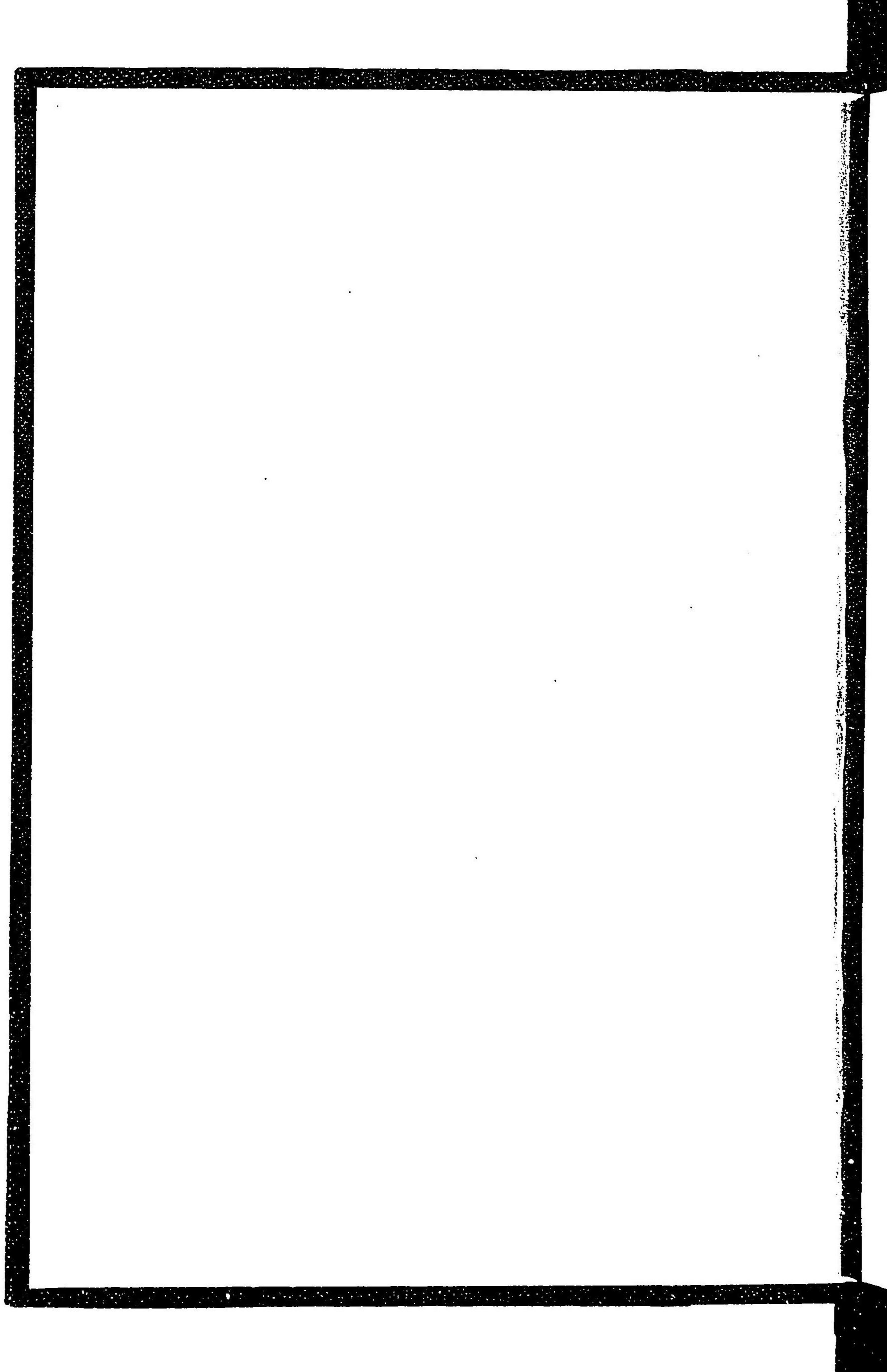
つき草

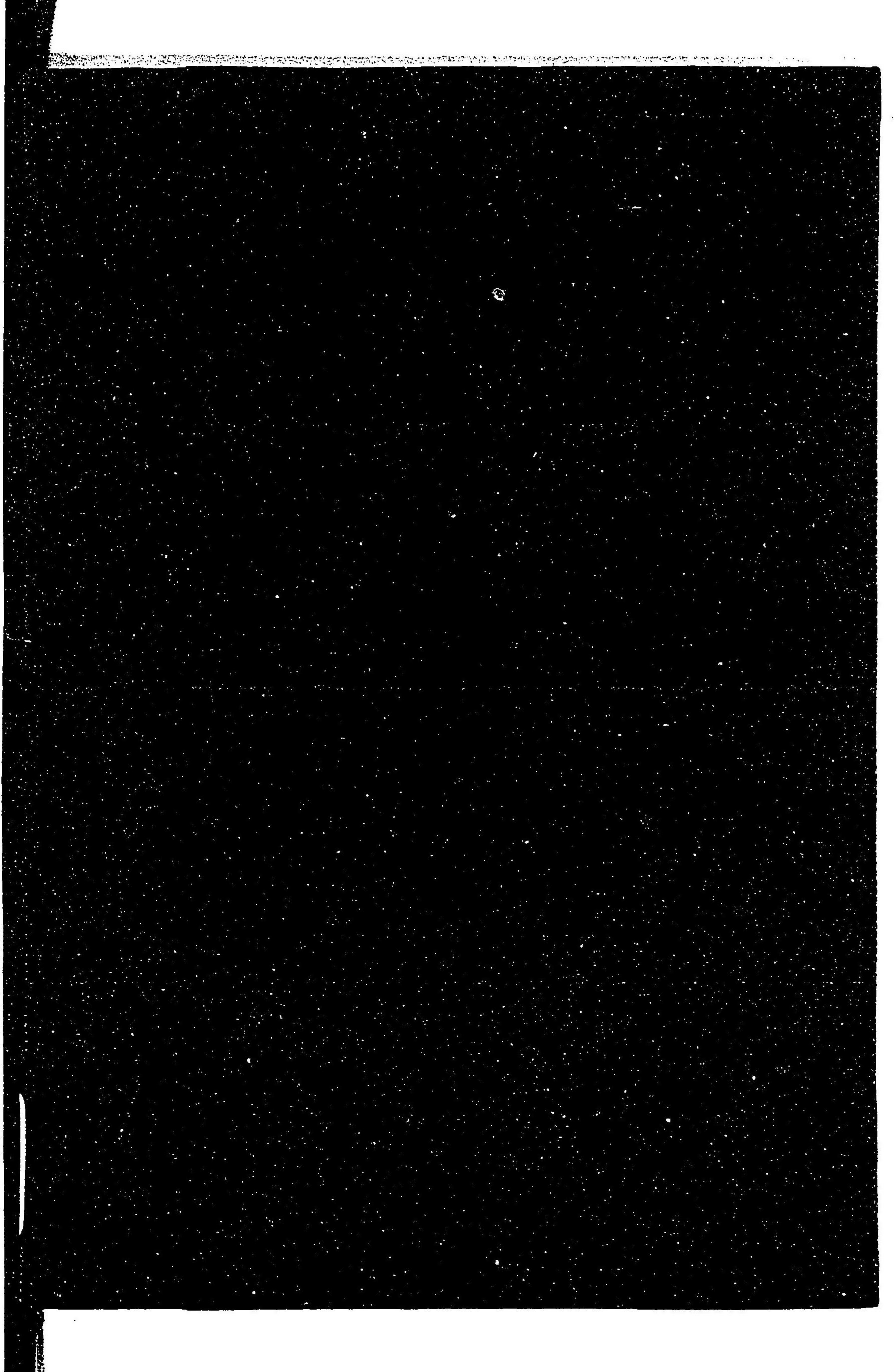
再刊中

かけ草

再刊中

東京春陽堂發行





329

85

101326-000-3

329-85

人の一生・飛行機

森 鷗外 (林太郎) / 訳

M44

DBY-0657



